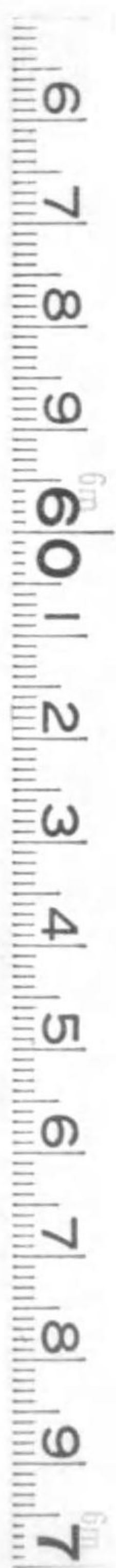


324

432



始



トエ-10-9

文學博士 三宅雪領序

秋山悟庵著

心身の修養
處世の秘訣
膽力の練養

禪と英雄

東京 中央書院發行

324-432



禪
と
英雄

三宅
雪庵
著序

大正
4. 2. 19
購求

序

予は常に思ふ禪は、精神修養上決して悪くはない、しかしこれまでの参禪のやりかたは面倒である、ノンキな封建時代ならばさういふことに浮身を籠めても差問題ないが、今時ではモット手取り早くなければならぬ、乃て今は如何に参禪を簡単にすべきかを研究しなければならぬと思ふ。兎に角是れを修めるものをして徒らに引込み思案ならず、隠遁者めかさず樂隠居的ならず、將た冷酷にならぬやうにせんければならぬ、是まで参禪を修めたもので悉く斯様いふ傾きがあるとはいはぬ、中には立派な人物、即ち英雄もある、本書に掲げられた古英雄などはな

かく活動的禪を修めたものであつたが、しかし随つて其弊に陥るものは十の八九まである、それにはいろいろの例があるが、今はいはん。最初に云ふた通り、禪は決して悪くはない、眞面目に、眞の禪に參じて自得したならば、其精神の修養の效果や決して少くはなからう、處が其れはなかゝの大難事である。今日までのやりかたでは可くない、是非こゝに一偉僧、否、強て僧でなくともよい、偉大なる人物が出て、改善するやうにありたいと思ふ、禪についての所感を述べて序に代ふることとする。

大正三年十一月

三宅雪嶺識

例 言

一、本書は主として古來英雄の精神生活について、其資糧を禪に採りたる事實談を叙述したのである。其意は、大正日本の新英雄を打出し、以て世界的日本の國光を中外に發揮せしめんとするにある。

一、本書は題して禪と英雄と云ふと雖も、敢て英雄たらざるものゝ讀むべからざるものと限らぬ。苟くも忙中閑あり、動中靜あるの士は、宜しくこれによつて精神生活の糧とするも妨げない。否、誰か日本男子として未來の英雄たるを理想せざるものあらうや、各自一個の英雄の卵子であるてはないか。

一、本書に掲ぐる古英雄と禪僧との相見については、或は史家の肯ぜざるものもあらう、今は正史上の有無に拘はらず、精神修養に裨益するの好材料であるならば、古人の傳説を其まゝ掲げたのである。讀者諒焉。

一、本書巻尾に白隱禪師の遠羅天釜の一節、鍋島侯近侍に贈るの書を附録とした、これは白隱禪師が國主領主たるものに教訓したる英雄訓であるからである。文中漢文の所は和譯した、これ現代の小英雄、即ち青年諸子に便ならしめやうとの婆心である。

一、本書の發刊に際して、三宅雪嶺博士の序文を惠まれ、錦上花を飾るの榮を得た、干茲、博士の高志を感謝する。

禪と英雄

目次

緒言

一、禪とは何ぞや

一名稱及び意義

二目的

二、英雄とは何ぞや

一英雄の精神修養

二堅實なる意志の修養

三堅忍不拔—雪樹友梅

四泰山の宏量大海の心—眞目昌幸

..... 一

..... 一

..... 二

..... 四

..... 一〇

..... 一四

..... 一五

..... 一七

..... 二二

五剛大なる脚力の養成……………三
 六智仁勇三徳の涵養……………三
 七生死透脱……………六
 八禪の活語活用……………七

三、禪と英雄……………

一源實朝の修養——榮西禪師……………四
 二北條泰時と明恵上人——治國の大本……………四
 三北條時頼と普寧禪との相見……………四
 四北條時頼道元禪師について受戒す——道元禪師……………六
 五北條時頼と聖一國師との問答——時頼の生死觀……………六
 六北條時頼と佛光禪師——祖元禪師……………六
 七北條貞時と一寧一山禪師——寧一山禪師……………六
 八楠正成と楚俊禪師……………六
 九正成正行への遺訓——明極禪師……………六
 一〇藤原藤房と關山國師……………六
 一一菊池武時と大智禪師——大智禪師……………六

一二足利尊氏と夢窓國師——夢窓國師……………七
 一三細川頼之と通幻禪師——通幻禪師……………七
 一四越前親實と一休禪師——一休禪師……………七
 一五太田道灌と雲岡禪師——泰叟和尚……………七
 一六武田信玄と快川國師……………七
 一七上杉謙信と宗謙和尚……………七
 一八大内義隆と玉堂和尚……………七
 一九前田利家と大造和尚……………七
 二〇伊達政宗と東嶽和尚……………七
 二一柳生但馬守と澤庵禪師……………七
 二二鈴木正三の英雄訓……………七
 二三山鹿素行の參禪……………七
 二四大石良雄と正眼國師……………七
 二五白隱禪師の武士訓……………七
 二六東嶽禪師の武士訓……………七
 二七勝海舟の禪劍の賜物……………七
 二八山岡鐵舟の禪定力……………七

四、生死交謝の時如何

一英雄の生死観	一九七
二源俊基	一八三
三源具行	一八四
四藤原資朝	一八六
五楠正成	一八八
六太田道灌	一八九
七北條氏政	一八九
八大内義隆	一九〇
九二條藤房信	一九一
一〇冷泉判官隆豊	一九一
一一岡部隆景	一九二
一二吉田隆次	一九三
一三天野隆良	一九三
一四小幡義賢	一九三
一五黒川隆像	一九三

一六明智光秀	一九四
一七伊達政宗	一九五
一八聖徳監飽入道	一九五
一九大石良雄	一九六
二〇大高源吾	一九七
二一山崎宗鑑	一九七
二二森川許六	一九八
二三廣瀬中佐	一九八
五、禪の道德観	二〇〇
六、新道德と禪道	二〇八
七、歸結	二二四
補遺—井伊直弼の修禪	二二八

附録



や ぞ 何 は と 禪

禪と英雄

秋山悟庵著

緒言

一 禪とは何ぞや

名稱意義—目的

禪とは何ぞやと今更らしく問ふまでもないやうではあるが、しかしながら、
 熟々観ずるところによれば、方今此處にも提唱彼處にも講話と到る處禪の
 販賣眞の禪風を擧揚して有爲の人物を作るてなくて多くは名利の爲に動
 く師家ばかりだから今は販賣と云ふチット失敬かは知らねどが盛んであ
 るやうであるが、其の多くは聽衆の頭の程度根機も考へずに實は自分にも

次 目

禪と英雄目次終

遠羅天釜—鍋島侯近侍書

判らぬ古則公案を拈提して、ヨイカゲンに大法螺も吹き放つて、曰く禪は不立文字、教外別傳ぢや、曰く言詮不及、意路不到ぢやなどと體よく通れて仕舞ふのである。てあるからたま〜參禪したてふ青年などが一體禪とは如何なるものであらう、たゞ碧巖録とか從容錄の所謂古則公案の外に禪はなにもものであらうか、しかも第一禪と云ふ名稱も判らず、意義も知らず、況してや其の目的は如何いふ處にあるのやらも了解しないて、いはゞ盲目の蔭のぞきの状態て陳腐漢の提唱に取だけ貸して居る位のもが多いやうである。て折角寶の山に登りて手を空しくして還るは惜いことであるまひか、乃て道人は今茲に此の缺陷を補ふべく、第一に禪の名稱及び其の意義第二に其の目的をザツと解説して置かうと思ふ。

一 名稱及び意義

名は實の賓と云ふから、名と實とは離るべからざるものである。故に其の物の名稱の起源を識らば其の意義、目的の概念は得らるるのである。然ら

ば禪の名稱を識り而して其の名稱の起源を了解するならば自ら其の意義、目的の概念を得らるゝ。然り禪は元は印度のサンスクリットの禪那と云ふの略稱であつて、支那語に譯して靜慮と云ふことになるのである。即ち靜慮と云ふは邦語で云へば、シヅカニオモンバカルと云ふのである、この靜かに慮かるとの邦語が既に其の意義、目的の概念を語つて居る名稱の下に自ら意義が別るのであるが、しかし順序であるから、ザツと述ぶるならば所謂讀んで字の如くて思慮を安靜にするとも安靜にして思慮すともなるのである。言ひ換れば吾人の心猿が一朝繩を解いて自由に放つたならば、彼れは恣に五欲の樹の枝から枝に飛び移つて狂ひ廻るやうなものである。即ち吾人の意識の枝の手綱をゆるめるときは、六塵の境に狂奔するに似るので、孟子が之を放心と云ふてるのが、禪はかゝる心猿かゝる意馬を制止して、靜平ならしむるのである。即ち散亂せる思想、煩悶せる精神を抑止して、安靜の地に到らしむるのである。一體吾人の意識、即ち心と云ふものは

譬へば水のやうなものである、この水の如き心が、地水火風の四大で假りに集合したる肉團器に盛られてゐるのであるから、この肉團器が種々なる外界の刺撃によつて動搖するも、其の心水に波浪を起すのである、而して若しその心水の波浪を静止しなければ、其が潭底に眞如の明月が印するわけにはゆかぬ、であるからこの心水の波浪を静めるには、其の容器を静平にして、而して据へなければならぬ、かくして吾人の此の心水の波浪を静平にして、而して清澄湛々たるに至つたならば、謂る菩薩清涼の月、竟畢空に遊ぶ衆生の心水、淨ければ、菩提の影中に現するて、眞境に達するのである。

二 目的

禪の目的は何であるかと云へば、解脱にある、解脱とは何ぞや、解脱とは讀んで字の如して、諸の煩惱の繫縛を解いて、そして心身を之れから脱けて、自由自在に遊戯せしむるのである。言ひ換へれば悟道である、身心脱落である。脱落身心である。若し今日の科學的の言葉でいふならば、吾人の人

生問題の解決を爲すのである。否、人生其自身の解決である。その解決や古往今來不可解として、難中之難の問題としてゐるのである、禪はその難中之難の大問題を一刀兩斷の下に解決するのである。所謂白雲を喝散し、衆流を截斷するのである。

見よ古今東西の思想家等は、這箇人生問題に就いて、其が解決を爲さんと、して、或は哲學に、或は宗教に、將た科學に、そが研鑽に努力を、甲は人生の目的快樂にありといへば、乙は嚴肅主義、克己主義を唱道する。或は云ふ世界は神の創造したもの、だといへば、他は唯心の所造である、と主張する、曰く、無神無靈魂、曰く有神有靈魂、曰く汎神、曰く多神、曰く萬有神、と甲論乙駁、喧々囂々、殆んど底止する所を知らざるに至り、紛々擾々として、今に萬古不動の解決を得ざる状態ではないか。斯の如く、幾千年の其の間、幾多の思想家等が寄つてたか、つて、腦漿を絞つたけれども、矢張宇宙は舊に依つて、茫々焉々焉たりだ、人生の問題は舊に依つて、朦々乎たり、漠々乎たりだ、是に於てか、白雲

を喝散し、衆流截斷底の活宗教が起つて来た、そして斯の死せる思想界に一道の靈光を授與したのである。所謂活宗教とは何であるか、之即ち禪である。この禪や即ち解脱の快刀を振りかざして、朦々たる白雲を喝散し、混濁せる衆流を截斷し、而して一超直入如來地に切り込むのである。斯く談じたり談じ來つたならば、諸子は必ずコボスであらふ。开はあまりに専門的にして吾人青年の耳朶に甚だ觸れがたい願くば通俗の術語を以て説話せられたし、乃て先づ解脱とは如何いふことであるかと云ふに、諸々の束縛を解き脱けるのである、即ち吾人が物質の爲めに身心を束縛せられて居る、その束縛を解き脱けるのである。譬へていふならば人は恰かも蠶の繭の如きものである、自身から絲を出して自身を纏縛して、終には自身の自由を失つて仕舞ふのである、しかしながらこれ即ち大死底になつたる當體である。然り、それである。

若し箇中生氣あり、活機あるものであつたならば、大死一番して大活現成

するのである。彼れ繭中にあつて、心機一轉して蛾となり、而して再活現成するのである。人生も亦復然りである、自ら種々の世界を造り、種々の宇宙を造り、そして世界の爲め、宇宙の爲めに束縛せらるるのである、之れを自業自得と云ひ、無繩自縛と云ふ。

老子は之を慨歎して云ふ、吾に大患あり、此の身あるが爲めなりと、されど禪の見地から云ふならば、敢て大患とするに足らぬ、否、その大患を解脱して自由安樂の境界に入るのである、何ぞ快哉と叫ばざるを得んではないか。

嗚呼、活宗教なる哉、禪や。

前にも説話せし通り、禪の目的は這箇の解脱を期し、悟道に入るのである。而して解脱といひ、悟道と云ふも畢竟はこの人生の大患老子に謂はせれば、この束縛を解き脱けて、大自由大安樂の眞境に直入するのである。所謂大自由大安樂の眞境とは如何なる處なりやと云ふに、絶對の理想境である、絶對の自在卿國である。これ即ちプラトンの理想國、基督のパラダイス、

佛陀の涅槃界、或は妙喜世界、極樂國土がこれである。人誰が束縛を厭離し自由を欣求しないものはなからうや、所謂解脱を求め、悟道を得たいは人の常情であるが、しかし容易に得らるるものではない。これは献身的でなければならぬ、不惜身命でなければならぬ、大死一番せにやならぬ。即ち身を捨て、こそ浮む瀬もあれど、あまり吾人は其の身否、人生てふものに愛執するからます、束縛せらるるのである、生死の淵瀬に沈溺してあまりにモガクから愈々深水にはまつて仕舞ふのである。されど吾人が人生に愛執せぬて身を捨てよと云ふのは決して彼れ老子を學んで、吾に大患あり此の身あるが爲めなりてふやうな厭世悲觀せよとの所以ては、毫頭ないのである、我が身を捨てよとはつまり積極的に此の宇宙の間、人生の間に處して、あらゆる束縛と奮闘して、あらゆる煩惱の賊と戦つて、而してそれを降伏して其の羈絆を解除し、脱却せよと云ふのである。これしも道元禪師は身心脱落と云ひ、脱落身心といはれたのである。

昔し或る僧が師家に參見して、冀はくば解脱の法を示したまへと請ふた、時に師家曰く、誰れか汝を縛すと、反問した。此の僧若し伶俐の漢だつたならば、言下に省すべきであるが如何であつたか。誰れも決して他から來て束縛するのではない、人々自己心意から束縛するのである、前の述べたる如く、蠶の蟲のやうなものである。即ち無繩自縛である。即ち慾望、名利、虚榮、愛情等の爲めに縛せらるるのである。古語に人は暗から出て暗に還るとは、凡夫迷妄の状態と云ふたのであるが、多くは皆束縛から來つて束縛に了つて仕舞ふものである。乃て前にも述べた通り、禪は此の束縛を解脱するの利劍である、此の妖雲を喝散するの涼風である、是れ禪の目的である。而して斯の目的に諦達せんとするには、第一意志の修養に努力して、堅忍不拔、金剛不壞の大意志を鍛鍊せんければならぬ、而して這箇の大意志が鍛鍊したならば、大勇猛の心を以て向上し、突進するのである。即ち虎口裡に身を横へ、否、虎穴に入つて虎兒を捕へ、蒼龍窟に下つて、驪龍領下の珠を採ると

をも爲し得らるるのである。而して此の目的に達し、此境界に到つたならば、生死悠悠々去來に任せ、順逆縱横放把自在、殺活與奪まゝ、自由の活作妙用を得らるるのである。

二 英雄とは何ぞや

英雄の精神修養——堅實なる意義の修養——堅忍不拔——泰山の宏量大海の心——剛大なる膽力の養成——三徳兼備——生死透脱——禪の活語活用

英雄とは何ぞやとはコハあまりに平凡なる問ひであるやうではあるが、しかし誰れしも一口に英雄とか豪傑とかいふけれども、未だ英雄の定義を明瞭に答ふるものはなからうと思ふ、殊に漢學素養に乏しき現代の青年諸君には英雄の字義さへ判らぬものが多いであらうと思ふ。乃て若し英雄の字義から話すならば、支那人の字書には智萬人に超ゆるを英と云ひ千人

に過ぐるを俊と云ひ、百人に過ぐるを豪と云ひ、十人に過ぐるを傑と云ふと、而して雄と云ふはオオシクタケタケしきを雄と云ふのであつて、これ人に超絶したる男子にいへるのである。併し英雄とは敢て十百千萬などと數字によつて一定の標價あるわけではないのである。若しそれ英雄の定義を一言にして蔽へば、曰く、凡俗を超越したる偉大なる人物の總稱である。即ち英雄は時代の啓發者となつて、其が一言一行、一舉一動、悉く天下の法則となり、國民の模範となり、而して其の事業は社會の爲め、國家の爲め、不朽に傳へられ、其の精神思想は以て萬代の師表となり得るの人格を備へて居るものを云ふのである。

世人の多くは、單に英雄と云へば、劍を提げて三軍を叱咤し、智にして勇文にして武なる猛士名將を云ふものの如く考へられてるやうであるが、ソは一部の英雄であつて、廣義の英雄ではない。廣義の英雄とは何であるかと云へば、社會の各方面に涉つて、各々其道に傑出して時代の代表的人物とな

つて凡流を抽てたるものこれ即ち斯道の英雄である。即ち三寸の舌頭よ
く國家興廢の活斷をなすの政治家も英雄である。滔々たる熱辯、殺活自在の
妙用を爲すの宗教家も英雄である。五寸の管城、鬼神を動かし人心を躍ら
しむるの詩歌、文藝家も亦英雄である。縹緲たる閑情、幽妙なる遠神、よく人
を動かすの力ある名畫を描くの畫家も亦英雄である。技術精巧、神に入
るの工匠も亦英雄である。されば釋迦然り、孔子然り、基督然り、ワシントン
然り、ビスマーク然り、クラットス、ソクラテス然り、カント然り、ゲー
テ、然り、セキスピヤ然り、奈翁然り、孔明然り、傳教然り、弘法然り、道元然り、法
然り、親鸞然り、日蓮然り、其他古來の勇將、猛卒、又々然りだ。就中釋迦、孔
子、基督に於ては英雄の中の大英雄であつて、彼等の感化は眞に不朽性であ
つて、其の偉大なるや、天地と共に窮りなく、宇宙と共に存在するものである。
これ彼等は有形的のそれなく、精神的靈界の英雄偉人であるからである。
是に於てか、吾人は世の英雄を研究するにもたゞ其が有形の事業の上のの

み見ることはしない努めて、其の無形の精神的方面の研究を爲さうとする
ものである。古來幾多の英雄豪傑があつても、其が跡として、後世に感化を
與へ、仰慕せらる所のものは、其が有形的のものでなく、無形の不朽性言ひ
換へれば英雄の有形の事業でなく、寧ろ無形の心的生活のそれが永久的
不朽性となつて存在するのである。而して其が存在の長短、感化の及ぶ廣
狭は、其の人々の精神生活の大小による、即ち大なる精神生活は廣大永遠の
生命感化を得、これに反して小なる精神生活は狭小短近なる生命感化を得
るのである。これ即ち古今東西の英雄偉人に徴するも、精神生命の永遠に、
其の感化の廣大なるは物的英雄にあらずして多くは心的英雄、即ち靈界の
偉人にあるを以て知らるのである。されば吾人の常に模範とし、師表と
して仰慕崇拜するものは、斯の物的英雄にあらずして、心的英雄である、しか
しながら吾人が今本書に記述するところのものは、重もに物的英雄の心裏
に立入つて、其が生活の状態を観んとするものである。而して其の心的英

雄即ち靈界の英雄は他日記述するとにする。これ物的から心的に進むの順序であるからである。しかも所謂物的英雄が其の精神生活の資糧はこれを靈界の偉人即ち心的英雄から採るのである。而して古來我邦の物的英雄は多くは皆其の精神生活の資糧を禪から獲て居る。否寧ろ其精神生活は禪的生活であるの觀がある。されば今の修養の要目を叙述するならば第一英雄の精神修養。第二堅實なる意志の修養。第三堅忍不拔。第四泰山の雅量大海の心。第五剛大なる膽力の養成。第六智仁勇三徳の涵養。第七生死透脱。第八禪の活語活用。是である。少くとも此八大要素を有しなれば例へ物的英雄にしても眞の英雄となられぬ所謂匹夫の勇暴虎憑河の匹夫たるのみであつて未だ英雄とは遠くして遠いのである。

一 英雄の精神修養

大英雄小英雄英雄たるもの、英雄たらざるもの、差等を生ずるに至るは、それたゞ精神修養の淺深如何によつて別るゝのである。其が修養の深且

つ大なるものは大英雄を生み深且つ小なるもの小英雄を生む其の全くゼロなるものは地平線下の平々凡々たるのみ。否たゞそれ横目堅鼻の飯袋子たるのみ。禪に云ふ一寸坐れば一寸の佛五寸坐れば五寸の佛と云ひたるも此の意味を云ふたのである。彼れ釋迦何人ぞ我何人ぞと凡人も聖人も無差別平等である。王侯相將何ぞ種あらんなど云ふのも本来根本的に聖凡英雄と非英雄の差別あるわけでない、吾人といへども其の修養宜しきを得て深且つ大なるを得たならば吾人豈に英雄たり聖賢たるに難かるべきの理はなからうやないのである。これを以て觀るも苟くも英雄たらんもの否將來世界的日本の英雄たらんものは其が物的方面に發展すると共に精神修養の深大なるを要するのである。而して其が修養の深大なるには先づ第一歩として堅實なる意志の修養から進まなければならぬ。

二 堅實なる意志の修養

世に爲あるに足らぬものを卑怯未練とか薄志弱行と罵らるゝのである、

殊に今の青年は多くは此薄志弱行の四文字を以て評價さるゝやうである。所謂斯の薄志弱行、卑怯未練たらしむるものは誰れなりやといへばこれ臆病神や恐怖病がかくあらしめるのである。さればこの臆病神や恐怖病を退治せんければ國家有爲の眞男子、所謂英雄となるとが不可能ないのである。而して之を退治するの第一着の方法としては其本源根本に立ち入つて、査究し修養せんければならぬ。然らば恐怖病の本源、臆病神の本殿は何處にあるかと云へば、意根下のト度から來るのである。言ひ換れば意志の薄弱より生れて來るのである。故に先づ此を退治するには薄弱なる意志を撲滅して堅實なる意志の修養を爲さねばならぬ。然り然らば意志なるものは彼の心理學上からザツと説話するならば、それは非常に長くなるから、今はたゞ意志なるものゝ任務を大體について説話して置ふと思ふ諸君の知らる如く、意志といふものは彼の智情意の三分類の上から觀ますと、働きかけの心作用を持つて居るのであるから、何

かの目的を期して運動を始めるのである。智や情は其の意志の行動によつて實現せらるゝのである。であるから意志は吾人の心性作用の根本的のものである、吾人は今こゝに何か事を爲さんとするには此の意志の決斷を待たなければならぬのである。それ故に若し事に臨んで吾人意志が薄弱であつたならば其の行動が優柔不斷となつてグヅ／＼してゐるのである、これ意志の決斷力が乏しいからである。是に於て臆病神がつけ入つて來る、恐怖病が発生するのである。それ然り然らば如何にして意志の鞏固にし堅實にしてその臆病神を驅逐し、恐怖病を退治し得るかといふに、これ一朝一夕の事では不可能である、常に間斷なく、意志を修養するにあるのである。而して意志を修養するには、克己、節制、勇氣等が好資料であるが、所謂精神生活上に其か資料を得やうとするには、禪に參じて禪的修養を以て最も能い方法であらうと思ふ、如何となれば禪は意志宗であるから、本來禪宗その宗體が人格本位で意志教育が主となつてゐるから、乃ち言ひ換れ

ば參禪工夫辨道して以て彼の熱喝痛棒を喫して以て金剛不壞の大意志を鍊るのである。乃て今近き一例を擧げて、意志修養の範を示すならば彼の勝海舟伯が少壯時代に深夜獨り王子権現に詣て、意志の鍛鍊を爲したとがある。其の時の心持を翁が語つて

始めは深更に唯一人森々として樹木茂れる社内に立ち居るととて、何となく氣怯れし、寒風梢を拂ふ聲さへ物凄く、覺えず毛髪を豎てたるが修業の積むに従ひ、何とも感じなくなり、遂には四面寂寥の中に在つてヒウヒウと梢を掠める寒風の聲を聞くとが、一種の趣を添える様になつた云々

とこれ最初何となく氣怯れしたるはまだ恐怖病が全癒せず、臆病神が去らなかつた時の心的状態である。其の後修業の積むに従つて却つて始めに氣味悪く氣怯れし毛髪も豎つた寒風の聲も趣味を感ずるやうになつたてふはこれ即ち漸々に意志修養によつて前の臆病神恐怖病を退治し驅逐

したる心的状態である。斯くの如く意志の修養が可能で、所謂八風吹けども動ぜず天邊の月又坦山和尚の八風の狂浪飛騰に任かすてふ堅實なる大意志を鍛えあげるののである。而して斯る大意志が鍛えられてこゝに始めて剛にして且つ大なる膽力が鍊り上らるゝのである。

三 堅忍不拔

古來意志鞏固、堅忍不拔所謂南洲翁の始末に困るてふ人物は禪僧に多くある。これ禪は意志宗であるからである。今其の中の一人にして、王侯も大臣も始末に困つた英雄僧を紹介する。これ即ち雪村友梅禪師其人である。

権力と富力とに叩頭して、遂に腐敗墮落の淵に沈淪したる五山の禪僧の其中に立つて獨り稀世の一大英雄雪村友梅禪師の如きを出だせしは實に不思議と云はねばならぬ。

禪師は越後國は白鳥郷の人であつて、幼時に童子となつて寧一山の門に

入り松竹梅三友の一人であつた而して他の二人は世に傳ふるところがな
いが、獨り友梅のみが嶄然頭角を顯はし、十八歳にして支那に入りて、諸方を
歴參しやうとしたが、不幸にして國事探偵と云ふ嫌疑を受け、無慘にも書
川の獄に繋がれて仕舞つた、而してあらゆる拷問に遭ふたが、彼れは屈せず
撓まざるの大意志を以て、遂に彼れ元人を感謝せしめた、而して萬死の中に
一生を得て、なほ西蜀の僻陬に投竄の身となつて、前後二十三年の慘苦を嘗
めて日本に歸り、英名を天下に轟かしたのである。
即ち時は元の成宗鐵木耳の大徳十一年であつて、弘安の役後二十七年目
で、彼の十四萬の元兵生きて還るもの、纔に三人てふ、大悲慘事のあつた後で
あるから、其の怨恨はまだ元人の肺肝に徹して居つて、寤寐にも忘れぬ時で
あつた、是より八年前に元帝が時の高僧一寧一山を我が國に派遣して我が
國狀を探偵せしめんとした位であつた、友梅禪師が彼の國へ求法の爲に渡
航したのがかゝる嫌疑を被つたと云ふも無理のないことである、禪師は神

ならぬ身の其れとは知らず、たゞ求法の一念抑へがたく、彼へ渡つて湖洲
道場山の叔平隆和尚の許に安居した、ところが遂に彼れは日探であると引
捉へられて、晉川の獄に投ぜられた、時に叔平隆和尚も禪師を止宿せしめた
爲に連坐して斬殺せられた、禪師は種々の拷問に遭ひ、愈々斬に處せらるゝ
とに判決せられて、あはれ刑場に引き出され、今や白刃首に臨んで、身首相別
れんとする一刹那にあつて、神色自若として、些も動ずることなく、徐に彼
れ祖元禪師の

乾坤無地卓孤筇

且喜人空法亦空

珍重大元三尺劍

電光影裡斬春風

と云ふ一偈を高聲に吟した、所が彼れ無情なる獄卒も大に驚歎して此の
状態を上奏した、スルと帝王も彼が生死透脱したる大膽豪氣なる眞個の大
丈夫たるに深く感じて、死罪を赦した時に禪師は年僅に二十四歳であつて、
即ち渡航の後七年目であつたさうである。

それより三年の後西蜀に謫せられた西蜀は今の四川省であるから元の
都市からは中々遠い彼の有名なる函谷關を越えて秦隴を渡り崧華を望み
て雲棧石梯の峻阻を跋涉する等其の道途の辛酸酷苦實に名状すべからざ
るものがあつたそこで幾多の慘苦を嘗めて漸く成都の貶謫地に着いた彼
の函谷關を踰ゆる時の十絶句と云ふは是の時の作である今一首を記して
如何に英雄がかゝる酷苦の間にあつて胸中閑日月を有せしかを偲ぶ

函谷關西放逐僧

是何頑惡得人僧

獨體刃下逃腥血

脚債會煩驛吏微

と悠々として諷詠して萬里の異域に流竄の身となるも丈夫の心膽は牢
固として抜くべからず飽まで神州男子の面目を失墜せざるに異邦人も遂
に感服して其の道聲一時に揚りこゝに海外の一孤客しかも刑餘の一比丘
が遂に文宗帝の殊遇に接し實覺眞空禪師の號を賜ひ京兆の翠微寺に住せ
しめられた。禪師はかく異數の特典に浴し萬乘至尊に禮遇せらるゝも更

に意に満たず萬里天涯故國の老母を想ふの情切なるに白髮夢に入つて歸
朝を促した當時の元の高僧茂古林詩を贈つて曰く

道林海外來

歷涉幾難阻

不唯凌驚濤

益遭世網苦

脫身萬死中

尅志在佛祖

有如百鍊金

遠指色可觀

玄機歷落如轉丸

迅手展托胡爲難

萬人叢中獨穎拔

一鏃解破三重關

重來兩臉鐵色黑

欲話三生緣未得

茶甌放下便言歸

爲省慈親走匍匐

床頭拄杖不假舉

一句臨歧聽吾語

水宿風餐宜喜爲

扶桑夜半金烏飛

これによつて見ても禪師が如何に彼れ元人の推尊するところとなつた

かは想察せらるゝのである、これ實に禪師の百折不撓、千挫不屈の大意、堅忍不拔の大精神を以て、萬里異境に在つて、日本男子の氣象を發揮したからである。

禪師は元の天曆二年、漸く歸朝の便船にて本國に歸るを得た、即ち我が元徳元年であつた。禪師十八歳にして渡元し、四十歳にして歸る、其の間實に二十有三年であつた、其の間の苦辛、慘憺は實に筆舌の及ぶ所ではない。これ決して尋常凡流の爲し得るところではない。禪師は常に門生等に諭して、汝等須らく奈良の大佛を理想とせよと、即ち其の語に、
「吾が法子法孫たるものは奈良の大佛に參詣せよ」と云はれしも、これ敢へて大佛そのものを有難いから信仰せよと云ふの意ではない、禪師の意は、人は成るべく大きな處に着眼して向上進歩せんければならぬ、而して結局は無上正眞道、即ち眞如の太極に到達せんければならぬ、との意である、其の意義は禪師大佛の偈があるそれを讀まば窺はるゝのである。即ち曰く、

範金十六丈爲身、
除是虛空圓滿體、
人間彫刻盡兒孫、

と、何ぞ其の理想の崇高にして、且つ雄大なる、苟くもそれ英雄たらんもの、須らく這箇の宏量大心と、堅忍不拔の大意志を鍛鍊すべし。これ餘事ながら、こゝに此の豪僧を紹介したのである。

四 泰山の宏量大海の心

雄鎮扶桑第一尊、
眼空寰宇、
氣吞乾坤、

大心の大量を以て、

海は濶くして魚の躍るに任せ、天は空くして鳥の飛ぶに任す

て、男子苟くも這の宏量なくして可ならんやである、即ち泰山の量あれば、たとへ三家村裡にあつても、高風霽月神氣爽快である、若し之れに反して、識量狭小にして品性卑劣ならんか、たとへ五都市中に居るも、心情齷齪たらん、されば苟くも英雄たらんものは、襟度廓落として、胸中の荆棘を刈除し、取捨

憎愛の葛藤を截斷し、自他の往來を便にするがよい、これ天下第一等の自由自在國であり、快活なる眞世界となるのである。

然り、禪はこれこの胸中荆棘を刈除するの快刀である、この憎愛の葛藤を截斷するの利劍である。彼れ無門關に曰く、

大道無門、千差有路、

透得此關、乾坤獨歩

と。又道元禪師が

所謂の天心とは、其の心を大山にし、其の心を大海にして、偏なく黨なきものゝ心なり。

と諭示されてある。これ元より此の泰山の宏量大海の心は、敢て禪の專賣特許と誇るわけではないが支那の儒者も次の如き言をならべて居る、

泰山は土壤を譲らず、故に能く其の大を成す、

河海は細流を擇ばず、故に能く其の深を成す、

又彼の基督も其の徒に訓示して、汝の敵を愛せよ

と云ふて居る、さればこの泰山の宏量は、苟くも英雄たり、偉人たり、否、君子大人たらんものは、古今に亘り、東西に通じて、孰れも修養せざるべからざる主要素となつて居るのである。されば予輩は今敢てこれを禪によつて修養せよと諸士に強ひんとするものではない、しかしながら予輩の思考する所によるに、禪は他に比較するにその徳を修養するには、よりよき便があらうと信ずる、开は如何となれば禪の道徳の主要とし、實行するところのものは、無我、慈悲、無慾、恬淡、清廉、潔白、自重、自尊等の諸徳である。是等の諸徳はよく、泰山の宏量の天心を養ふの主養分を占むるからである。然り、是等の諸徳は到底偏黨比周、私情的偏執を以て、取捨増愛すべき筈なく、取捨増愛の私情的偏黨のなきところ、即ち大山の量大海の心を致す處である。故に予は今この修養の便益からして、否、最も近きものよりして、禪によつて修養したな

らばよからうと勸るのである。
由來我が國人は局量狭小であつて、島國的根性であるとは或る一部のもの(西洋心醉者)の評破するところである。が併し予輩の觀るところによると、決して我が同胞は島國的狭小なる根性ではないのである。我が日本民族の特有性は極めて寛容なる包括性に富んで居るのである。即ち綜合的受用性質を以て組織せられて居ると。并は決して予の獨斷的に云ふのではない。我が國建國以來の思想信界將た物質的文明の史面を見るも、皆これ外來輸入の其の物を我に於いて取つて以て能く綜合調和して以て悉く日本化的して仕舞つたのではないか。佛敎然り、儒敎然り、基督敎もまた漸々に本格的化さんとしつゝあるに見るも知るべきである。たゞ或時代に當つては治國の政策上からして鎖國籠城主義を取らるとありたるは止むを得ざるものであるが彼等ばかりの時代をも考察しないで、猥りに妄評するは甚だ酷ではあるまいか。

ところには現代は全く時勢が變つて、世界同一家、四海皆兄弟の開放主義でふ大舞臺に上つて、大活劇を演じやうと云ふの時である。されば、苟くも世界的日本男子日本英雄たらんものは些々たる事に神經を惱まして、徒らに取捨増愛の私情に驅られ、牆壁なき樂園に自から牆壁を築き、關門なき大道に私に關門を構へ、而して廣き大地に高き天の下にありながら、踟躕匍匐するやうなるをば無さず、早く私情の牆壁を取り除き、増愛の關門を打破し、天空海淵魚鳥の飛躍に任かすてふ、日本男子の氣性を發揮すべし。爰に今其の大山の量大海の心あるの大英雄を、彼れ天下分け目の戦争と云はれたる關ヶ原の戦に於いて、古今の軍師として其の名も高き眞田昌幸に於いて見るとを得たのである。眞田昌幸が西軍に應じて、僅かの兵力を以て信州上田の城を守つて居つたのであつたが時に徳川二代將軍秀忠、山道の軍を督して來つて攻めやうとした、そして先鋒の石川玄蕃がすてに城北冠嶽に陣して居つた、乃て秀忠侍臣島田兵四郎なるものに命じて軍令を玄蕃に傳

へしむ兵四郎命を奉じて營外に立ち出て遙に冠嶽を望むに黛色遠く見ゆる乃て彼れ心に思ふやうコハ此城を迂回せば路甚だ遠く随つて時を移す事も亦多いてあらうよし此城内を通過せんにはと。馳せて城下に到り馬より下り城門を叩いて懇ろに乞ふて云ふ某はこれ東軍の傳令使鳥田兵四郎なるもの今主命を奉じて急を先鋒に傳へんとする者である然る所某愚鈍にして地理を知らぬたゞ見る所城を廻るは迂遠であらうと若し幸ひにして城内を通過するとを御許しくださらば何の幸ひかこれに加へんやと。是に於いて門を守るもの斯る無謀なる言動に喫驚し馳せて城將昌幸に此の事を告げたスルと流石の昌幸もだ些の驚ける氣色もなく從容として告げて曰ふ成程敵の傳令使として他の城内を通過したと云ふとは古來未だ曾て其例を聞かぬされど彼れ單騎にして來つて我が城門を叩き大膽にも斯事を請ふ其の勇武や實に賞すべきものである。て我れ今彼れに路を貸さないと云ふたならばこれ我の怯弱を表白する事となる。許せば彼れ

の通過するを宜しく門扉を開いて彼れを引導せよと。守門のもの還りて兵四郎に其の意を告ぐ是に於て兵四郎欣然として馬に一鞭を加へて飛鳥の如く城中を通過し傳令を果して歸りて復た來つて路を借らんとを求めた昌幸愈々感歎して兵四郎を延見し謂つて云ふ我れ既に敵人なる貴所をして城中を横斷せしめたからには貴所宜しく要害の存する所を見て置き他日先登の功名を建てよされども、城の要害は池柵にあらざして一に主將の心に在りと云ひながら自らこれを導きて到る處を縦覽せしめて城門外へ送り出した兵四郎は敵ながら深く昌幸の宏量大度なるに感服し厚く禮謝して復命したと云ふ美譚がある。兵四郎の膽勇も賞すべきではあるが昌幸の宏量即ち大山の如く大海の如かりしには古今稀れに見るところのものであらう。

嗚呼、冀くは現代及び將來に於ける我日本民族言ふまでもなく、東洋の一角に偏在せる小日本民族ではない宜しく世界の舞臺に上つて世界的英雄の大發展大活動を演じなければならぬのである。されば些細なるを互に隠匿し互に猜疑し互に嫉視し。而して自ら牆壁を築き門戸を構へて黃禍や白禍を云々するが如き蚤の罌丸四つ割的の少量卑窳を打ち壊り須らく達磨の巨眼と布袋の大腹的宏量となつて、彼此の黃白禍論を打破し、而して眼は寰宇を空しうし、氣は五洲を呑むてふ世界的偉人、世界的英雄となつて欲しいのである。

五 剛大なる膽力の養生

前節に謂へる意志の修養ができたならば自ら膽力の剛にして且つ大なる結果を得るのである。人苟くも事に臨んで怯めず臆せず、驀直に突進するには一大勇猛の心がなければならぬ、而して其が勇猛心を得るには膽力によらぬければならぬ、彼れ支那の有名なる文章の大家が文章を作るにも、

膽は大なるを要し心は小なるを要すと教へて居るが、吾人自分の實驗によりては、又他人の行動に見ても膽の小なるもの意志の据はらぬものは何事も成功しない例へば一つの文章を作るにも膽玉が小さくしては思ふ十分の事を筆端に言はする事が不可能ぬ、辯士論客にしても膽小なれば吾に十分の正理があつても其れを發揮する事が不可能ぬ。問々見る所によると、演壇に立つところの辯士も膽玉が小さければ所謂聴衆に呑まれて仕舞つて足ヲノ、キ胸に働氣をうつて耳には早鐘をつくやうて中々思ふ半分も辯ずる事ができぬ。彼の政治家にしても、法律家にしても、商法家にしても、將た軍人にしても、膽玉が小さくしては到底自己の理想を發展して十分の成功を得ることはできぬ。學生諸君が試験場に臨んでも、膽玉の小なるものは平素頭に蘊蓄して居る事も場怯れがして十分の答案を書くことができないのである。況んや劔刃上に馬を走らしめ、虎口裏に身を横たふてふ物的英雄。千聖の路頭を坐斷して、群魔の境界を打破すてふ、靈的英雄たる

に於いてをやだ。剛大甕の如き膽力なくしては不可能ないのである。因みに其膽力養成の方法としては種々あれども今は煩を避けて略するが、後章禪と英雄に於て古英雄が練膽の状態を説話するから往いて見るがよい、多言は要不着だ。が要するに膽力養成も亦英雄たり得るの一要素である。

六 智仁勇三徳の涵養

意志が強く、膽力が剛大になつても、若し智仁勇の三徳が缺けて居つては眞の英雄とはいはれぬ、即ち英雄の資格がないのである。苟くも此の智にして仁、仁にして勇でない意志、膽力は如何に堅實で、剛大であつてもそれはたゞに暴虐となり、残忍となるのである。これと同じく如何に智者たり仁者たり、又勇者たらうとするもその意志が薄弱で、膽力が豆大的では到底この三徳を得られぬのである、乃ちこの三徳を實現するにはこの大意、大膽力がなければならぬ。乃て今禪的修養の上から見てもこの三徳の兼備が物的英雄、心的英雄、孰れにも缺けてはならぬ、靈的、即心的の方にてはこ

れを戒定慧の三學とするのである、三徳と三學これ即ち異名同體である。三學の第一の戒は徳の仁に當り、定は勇に當り、慧は智に當るのである、即ち戒の本體は慈悲であるから仁となる、定は禪定のこと、即ち定力は勇となる、この大定力があつたならば風吹けれども動じない、よし山は崩れ海はあせなんだなりとも動ぜざる、底の大膽力、大定力、即ち勇に當るのである。三學の慧は三徳の智に當るとは、慧は般若の眞智であつて善惡正邪を辯別して一切の煩惱妄想を截斷するの利劍である、であるから若し靈的、偉人、心的英雄たらんものは、此の三學兼備して居るならば、如何なる煩惱妄想の賊、悪魔軍の群に入るとも何んぞ恐るゝに足らんやである。即ち心に大慈悲を抱きて三昧王三昧に安住し、般若の大智劍を揮つて八萬四千の煩惱を退治し、百千萬億の魔軍を降伏するのである、これ心的英雄であり、靈界の偉人と稱するのである。而して所謂三徳兼備するならば、千軍萬騎も何のその身を殺して以て仁を成すてふ大慈悲、仁愛の小心を以て、籌を帷幄の裡に

運らして勝を千里の外に占めぬ、而して千軍萬馬の敵も怯めず、臆せず勇猛邁進するを得るのである、これ即ち物的英雄にして萬夫不當の猛卒とかいひ三徳兼備の名將と稱するのである。或はいふ、この三徳は實に日本建國の基礎的神寶たる三種の神器の徳に契當してると。然り眞理は何れに行つても眞理である。敢て牽強附會するではない。眞に然りだ。

七 生死透脱

如何に三徳兼備して居つても生命を惜しむやうではまだ、眞の英雄とはいはれぬ。眞の英雄たるには南洲翁西郷隆盛が云へる、始末に困るエラ物でなければならぬ、即ち南洲翁は、命もいらす名もいらす官位も金もいらぬ人は始末に困る者なり。此の始末に困る人ならては艱難を共にして國家の大業は成し得られぬなりと。即ちこの始末に困る者は眞の英雄である、即ち生死の關門を打破して生死不二の境に入つたる英雄である。如何なるものでも、此の生死を念頭

におかぬてかゝつたならば、なか／＼手におへぬものである。彼の子猫の如きものでも死を決してかゝらると一寸と手がだせぬ、イヤ子猫とては、鼠でもさうである、窮鼠猫を噛むといふとがある、鼠位でも生を顧みないてあばれらるとなか／＼恐ろしいものである。彼れ微々たる小動物ですらなほ然りである。況んや萬物と靈長たる吾人々類に於いてをやだ。一體死は鴻毛よりも軽く、義は泰山よりも重しと云ふとはたゞ軍人のみに限つたやうに思ふが決してそんな狹隘なるものではない。死を顧みぬと云ふ者は敢て軍人が戰場に立つたときの覺悟のみには限らぬ學者でも政治家でも宗教家でも、將た技術家工藝家でも、皆其の道の研究に従事し一代の代表的人物、即ち斯界の英雄となるには生命を惜んで居つては到底駄目である、皆其の道の爲めには不惜身命でなくてはならぬ、こゝが虎穴に入らざれば虎兒を得がたしと云ふので、如何なる生知安行の天才家でも、生涯安逸に耽けて坐食飽飲して居つて斯道の達人となることは不可能ない

のである。であるから禪の奥義はこの生死の關門を打ち破りて生死不二
 の眞境に到るにあるのでこれを大死一番して大活現成と云ひ、死中に活を
 得活中に死を觀るとも云ふ。道元禪師この生死不二の消息を示して、生死
 の中に佛あれば生死なし、但生死即ち涅槃と心得て、生死として厭ふべきも
 なし、涅槃として欣ぶべきもなし、是時始めて生死を離るる分あり
 といはれた。これ即ち生死透脱の方法を示されたので、若しこの境に入
 つたならば生死岸頭に立つて、兩手撒開底の活作略がてきるのである。鈴
 木正三老人が一日武士に示して云ふには
 後世を願ふといふは、此の糞袋を何とも思はず、打捨つるなり、之を仕習ふ
 間より別の佛語を知らず、我れは若き時よりこれ計りを仕習ひしなり、先
 づ千騎萬騎抜きそろへたる備の中へかけ入り、胴腹を衝き抜かれて死に
 死にして死習ひしに、それはやがて仕習ひて翹入られたり、亦谷底に大蛇
 口を張り居るに、飛び込み角に取り居習ふに、これもやがて仕習ひて角に

取りつき居られたり、こゝに何もなき樹の下へ、只落ちて死んで見るにな
 か、張合なくして飛ばれざるなり。然れども此頃になつて少し飛ば
 るゝなと思ふなり。各々も何とも思はず、自由に捨らるほどさま／＼巧
 みて此の身を捨て習はるべし、成る程強き心を用ゐずして叶ふべからず。
 乃て老人はなほ武勇は生死も離るるところに出で、而して其の修養は佛法
 にならなければ到底不可能のであるとの見地からまた示して
 佛法なくして武勇つかはるべからず、血氣の勇は何ほどよしといふとも
 どどこに臆病なるところあるべし、我も高き樹の上に立つて下を見れば
 足振へて臆病出づるなり、佛法修行なくんば大丈夫の漢に成るべからず
 と、老人が佛法と云ふは禪を指したるものである。开は後章に述べるから見
 らるるが可い、苟くも地平線上に立つて社會の爲め國家の爲め活動せんと
 するの大丈夫漢。即ち英雄たらんものは、平素に此生死不二の境に在るの
 工夫が肝要である。而して時に臨んで身を殺して仁を成し、上國君に對

しては誠忠を盡し、下同胞に對しては仁慈を以て交り。而して弱きは扶け強きを挫き、愛憎の情に惑はず、畏怖の念を去り、意志の自在大自由を獲て事に臨んで勇猛精進、驚天動地の大活動を作し得るの潜勢力を養ひ、即ち生也全機現死也全機現の王三昧に坐つて居らなければならぬ。

四〇

八 禪の活語活用

前述の如く、既に生死の關門を打ち破つて、即ち生也全機現死也全機現の三昧に坐つて、生死岸頭に立つて、兩手撒開底の真境に入るの大丈夫漢ならば、時に隨ひ事に臨んで其の作略自由自在となるのである。今は靈界の英雄即ち禪界の活納僧が作略自在の一端を示すならば、一擧手一投足、一句一言、悉く英雄的たるを思はしむるのである。されば禪と英雄の前提として左に掲げやう。

(一) 劍刃上に馬を走らしめ、火焰裏に身を藏す。何ぞそれ英雄的ではないか。

(二) 手に白玉鞭を把つて、驢悉く破碎す。

(三) 是非の關を透過して、羅籠の裏内に住せず。

(四) 生きて天堂を願はず、死して地獄を怕れず。

(五) 護生は須らく殺すべし、殺し盡して始めて安居。

(六) 危きに臨んで智勇奮ひ、命を投じて高節明かなり。

(七) 身を横へて宇宙に當る。

(八) 賊馬に騎つて賊を趁ふ。

(九) 人を殺すに眼を眨せず。人を殺さば須らく血を見るべし。

(一〇) 鞍上に人なく、鞍下に馬なし。

(一一) 進むを知つて退くを知らざれ。

(一二) 百尺竿頭に歩を進む。

(一三) 一槌に撃碎す精靈窟。

(一四) 饅湯爐炭も吹て滅せしめ、劍樹刀山も喝して便ち摧く。

(一五) 文珠提起す殺人刀、淨名抽出す活人劍。
 (一六) 丈夫自ら衝天の氣あり、如來の行處に向つて行かず。
 (一七) 把住すれば則ち山河色を失し、放行すれば則ち草木榮を發す。
 (一八) 蒼龍窟に下つて、驪龍領下の珠を採る。
 (一九) 虎口裡に身を横へ、赤脚にして刀山を走る。
 (二〇) 千聖の路頭を坐斷し、群魔の境界を打破す。
 (二一) 單刀直入の禪機、天魔の膽を衝く。
 (二二) 能縱能奪、能殺能活。
 (二三) 逆順縱橫、擒縱與奪自在。
 (二四) 白雲を喝散し、須彌を擲倒す。

と、這箇數番の語句、何ぞそれ英雄的ではないか。禪機と軍機期せずして相符合するをよ、これ古英雄が多く禪によつて其が精神生活を爲したる所以である。乃ち英雄はこの語句によつて其が心腑を刺撃せられ、而して活潑

三 禪と英雄

る禪僧が物外の活作略を觀て、以て憧憬推かなかつたのである、嗚呼禪と英雄所以あるかな。イザ次章に於て少しく其が因縁關係を説話する。

前章より禪とは何ぞや、英雄とは何ぞやについて略述して禪の教理、禪僧の作略、其の言行が一舉手一投足一言一行が悉く英雄的であるとを説話した。でこれから少しく英雄が如何にして禪僧と相見し、而して其の何物を禪僧から得て、以て自己の精神生活を爲して居つたかを査究し、説話しやうと思ふのである。乍併前にも略説したる如く、今の英雄は廣義のそれな、くて所謂物的英雄、即ち日本に於ける古武士の片影として、其が精神生活の方面のみを紹介するのである。されど古英雄といふもの、鎌倉以前は勿論、頼朝までにはまだ禪宗の勃興がないから、その關係もまだ起らない。頼朝の時に榮西が歸朝して始めて禪風を擧揚し、其道譽の高き、遂に鎌倉に開

え乃て頼家及び北條政子の招請する處となつて始めて鎌倉に赴きて禪風を擧揚した。故に今は實朝と榮西との關係から説話しやう。

一 源實朝の修養

(榮西禪師)

實朝は源頼朝の次子で頼家の弟である。頼家に繼いで征夷大將軍となつた資性英邁であつて能く武士的氣象を發揮し、君臣の大義を重んじた。深く佛法を信じて日本禪宗の初祖榮西に參じて禪要を得。又泉湧寺の中興の俊芻に就いて修得し頗る悟るところがあつた。されど惜いかな、時に外戚北條氏の專權に壓迫せられ徒らに虚位を擁して萬事意の如くならず、たゞ經を讀み歌を詠じて胸中の煩を拂つて以て自ら慰めて居つたのである。其の詞藻雄大にして、王朝纖弱の輓風を脱して居る。今其の金槐集について一二の例を掲げるならば、先づ彼れが尊王の大義を重んじたる赤誠の流出したるものには

山はさけ海はあせなん世なりとも

君に二心われあらめやも

なほ英雄の氣象、武士的の精華とも云ふべき武勇を發揮したるものには、

武夫の矢なみつくらふ小手の上に

あられたばしる那須の篠原

と、彼時に利あらず、外戚の專横壓迫の爲め、外柔なる如く、何の爲す事なく手を拱いて晏如たるもの、如かりしも、其の内の修養は榮西俊芻等の鉗錐下に鍛鍊せられて雄大崇高なる思想を蘊蓄してゐるのである、そは右の詞藻によつて窺ひ知るとができる。

榮西禪師は日本臨濟禪の始祖にして、建仁寺の開祖である。備中吉備野の人、年十四歳にして出家し、比叡山に登りて苦修、練行精勵、刻苦して、台學の真義を究めて、後宋に行つて諸方の知識を歴參し、不立文字、教外別傳の禪を學び、遂に虚庵徹禪師の室に入つて直指單傳の禪法を傳へ、建久二年に歸朝して、大に此法を擧揚した時

入に筑前守の良辨が天台の衆徒と謀りて異教徒として朝廷に訴へた、依つて榮西
 朝に於て辨疏した、其の辨に曰く、
 我朝に於て禪宗なるものは、今特にこれあるにあらず、昔傳教大師曾て内證佛法相承血脉
 一卷を製し、其初條に達磨直指の禪法を載す、今夫良辨昏愚無智にして黨を率ひ
 て朝に訴ふ、禪宗若し非なれば傳教も亦非に傳教若し非なれば台教立たざらん、
 台教若し立たざれば則ち台徒豈我を拒まむや、甚だしい哉、法高の祖意に疎きを、
 と、時に彼れ天台の學者有識のもの榮西が言を道理ありとし、良辨も亦大に懺悔す
 る所であつた、遂に榮西も罪せられたなかつた、是よりますく、道譽四方に聞へ、遂
 に鎌倉幕府の知る所となりて頼家實朝政子の歸依する所となりて鎌倉に請せ
 られ、將軍頼家の爲に不動尊供養の導師をし、政子の本願にて龜谷に壽福寺を創建
 し、大に禪風を擧揚した、土御門天皇の建仁三年に頼家の歸信によつて、京都東山に
 建仁寺を創建し、台密禪三宗の道場と稱して、大に禪風を宣揚した、元久二年に京都
 及び畿内大暴風起り、人畜の死傷夥しかつた、時に妖言して榮西が異法を唱たから
 である、遂に官使を遣して、榮西を詰責し、都を出さうとした、時に榮西對へて曰ふ、
 夫れ風なるものは天地の氣にして、豈西のなす所ならんや、若し人ありよく風を
 作さば其人尤も靈にして凡ならず、西都を出づべき理なし
 と、天皇これ然りとなし給ふて、却つて勅を下して建仁寺を官寺となし給ひ、是れ

より益々禪風が盛れになつて來た、彼れ反對者の壓迫が却つて其が反動を起さし
 め彌々禪宗の勃興を觀るに至つた。
 建久三年終に寂を示した、榮西曾て衆徒の爲に其の禪要を示して曰ふ、
 佛見法見有相無相共に截斷して胸中に一物なく廓落虛名にして、三世十方を通
 貫すれば、更に一法として人に示すべきものなし、生滅の身を以て、心を脱き道を
 説き禪を説じ教を説ぜば、是非海中に落つべし、佛法世法皆樂道順一々推殺して
 一法にも打ちつかざる、是れ大道なり、かくの如く述べ示すも、猶ほ是れ情識の口
 辯なり、その工夫用心は、みづから參決して知るべし、言句の上にはあるべからず。
 二 北條泰時と明惠上人
 鎌倉執權北條九代中に於て、殊に萬綠叢中の紅一點とも稱された明執權
 を誰とか爲すといへば、即ち北條泰時に第一指を屈するのである。尋ては
 時頼時宗の三指を屈するに過ぎない。中に就いて泰時は身天下執權の顯
 職に在りながら、自から無慾恬淡に居り、そして内家族兄弟間の親睦を得、外
 濟生利民に力を盡し、上下姦曲の諍訟なからむを期し、實に北條九代中の明

星と稱へらるゝ明執權實宰相であつた。彼れが其の身に處するに恬淡無慾であつた、一例を挙げれば、彼が父義時の没するや、其の遺産の大部分を舍弟等に分配して、自分では僅ばかりの領分に安じて居つたのである。然るに其の第宅などか、牆壁もまばらになつて、外部から其第内を窺はるゝやうであつた。乃て侍臣等があまりに外見の悪しきにたへかねて、忠告して云ふやう、土牆を築き、塹を設け、以て不慮に備へなければ、苟くも天下の執權たるものが何時如何やうなることがあらんと、計り難きに其の時に及んで急の防禦にはならぬてはありませんかといひたるに、泰時答へて云ふは、牆壁の事などは些細の擧であるが、つまりそれは民力を勞することである。それよりも我身に過失なきことを勉めたら、幸に自家全きを得よう。若し天命を失ふたら、鐵の牆ありとも何の補にもなるまい。

といつて、自若として居つたとの美談がある。彼れ源家の天下を横領して、自ら執權職の基礎を開きて、上皇室を蔑し、下主家を篡奪したる義時の子に

して斯る賢明なる君子、人的英雄の出でたるは、不思議でないか、否、これ決して不思議ではない、彼れをして斯く修養せしめたるものが、靈界の偉人として、當時に道譽の高き梅尾山には、明恵上人があつたからである。

明恵上人は名を高辨と云ひて、紀州有田郡石垣吉原村の人、華嚴宗の高僧で、九歳の時洛北高尾山に上り、華嚴を精研した、恒に建仁寺の榮西禪師と交りて、夙に禪味を咀嚼して居つた、元より華嚴は佛教中の頓大乘であつて、一歩進めば禪と一致するのであるから、明恵上人は身は華嚴宗の人であつても、其の云爲行動は純然たる禪僧であつた。

今其の言行の一二の例を示さん、人の來つて祈禱などを願ふものがある、我は朝夕一切衆生の爲に祈念を致し候へば、定めて御事も其數の中に申しまし候はん、されば別して祈り申すべきにあらざ、叶ふべき事に候はば、叶ひ候はん、平等の心に背いて御事ばかり祈り候はん、と親疎あるに似たり、左様に親疎あらんと謝絶せしと云ふ事をば、佛神もよも御開入れ候はじ。

の六字の教を爲して曰く、

われに一の明言あり、私は後生助からんとは申さず、只現世にあるべきやうにて有んと申なり、聖教の中にも行すべきやうに行い、振舞ふべきやうに振舞へよとこそ説き置かれたり、現世はとてかくてもあれ、後生ばかり助かれと説かれたる聖教はなきなり、佛も戒を破つて我を見ても何の益かあると説きたまへり、仍てあるべきやうにと云ふ六字をたもつべし、これを持つを善とす人のあるときはワガ悪きなり、過ちて悪きにはあらず、悪事を爲すものも善を爲すと人は思はざれどもあるべきやうに背きて、枉げて是を爲す、此の六字を心に掛けて持たば敢て悪しきことあるべからず

と道箇の六字は、極めて簡易にして、しかもこれ千古の金言である、否人生必須の訓言である、北條泰時承久の亂に父義時の命をうけて京都に上りたるに、彼の謀叛の落人は梅の尾の高雄山に隠ると聞き、部將をして捕へしめた、その時明恵上人を共に捕へて來た、乃て上人泰時に對つて申さるるやう、

此山は三寶寄進の所たるによりて、殺生禁斷の地なり、仍て鷹に追はるる鳥、獵に逃る歌、皆爲に隠れて命を續ぐのみなり、去は敵を通る軍士のかくして命ばかり助らん木の本岩のはさまに隠れ居り候はんをば、我身のおとがめに預りて難事に逢候はんずればとて情けなく追ひ出して敵の爲に搦め取られ身命を奪れんことをかへりみぬやは候べき、我本師能仁の古へは鳩に替はりて全身を鷹の餌

になされ、又飢えたる處に身をたび候しぞかし、其までの大慈悲こそ及び候はずともかばかりの事の無くやは候ふべき、隠す事ならば、袖の中にも袈裟の下にも隠してとらせはやとこそ存じ候ひしが、向後とても喪くべく候事、是政道の爲に難義なることに候はば、即時に愚僧が首をはねらるべし

と、泰時此仰を聞き給ひて、頻りに感涙を流して、子細や知らぬ田舎夷の無禮となしたる罪を謝して、只管すら上人の法益に浴せんとを願へりと。

治國の大本

泰時計らずもこの靈界の偉人明恵上人に謁して、一代の寶物を授かつた。嗚呼、其が一代の寶物とはそも何であらふ、金銀珠玉か、將たダイヤか、イヤ金銀にあらざれば、珠玉にあらざれば、將たダイヤにあらざれば、無欲の二字のみであつた。乃ち明恵上人泰時に訓諭していはるゝには、

此の世の亂るる根源は何より起るぞといへば、只欲を本とせり、此欲心一切に遍して萬般の禍となるなり、是天下の大病にあらずや。是を療せんと思ひ給はば、先此欲心を失ひ給はば、天下自ら令せずして治るべし

と。泰時申して云ふ、

此條尤肝要の間我身ばかりは心の及候はん程は此旨を堅く守るべしといへども、人々皆是を守らん事難し、如何し候べき哉

と。上人答て宣はく、

其れ易かるべし、只太守一人の心に依るべし、古人曰く、其身直くして影曲らず、其政正して國亂るとなしと、此正しきといふは無欲なり。只太守一人實に無欲に反りし給はば、其徳に誘せられて其用に耻ぢて國家の萬人自然と欲心薄く成べし。少欲知足ならば、天下安く治るべし。天下の人の欲心深き訴へ來らば、我欲心の直らぬ故ぞと知つて我方に心を返して、我身を耻しめ給ふべし、彼を咎に行ひ給ふべからず。譬へば我身のゆがみたる影水にうつりたるを見て、我身をば正しく成さずして影のユガミたるを嗔りて、影を罪に行はんとせんが如し云々、太守一人少欲に成給はば、一天下の人皆かゝるべし云々

又曰く、

良醫は能く其病源を察し、寒熱の中る所に審にして、後藥を投ず、故に瘥ざるとなし、世の治をなすものは其を察せず、濫りに賞罰を行へば、姦偽益々作り、風俗日に偷へず、之れが治を爲さんと欲するも由なきのみ、譬へば庸醫の病源の在る所を知らずして、妄りに治療を施し、其病を治めんと欲すれば、疾愈々重かるが如し。治の成らざる人の欲心あるに由る欲心一たび萌さば、衆禍競ひ起る、足下政柄を執り、躬自ら卒勵せば、何事か成らざるあらん云々

と。かゝる至上至極せる無形の寶物を授つたから遂に彼の如き修養が出來而して君子人的英雄たるを得たのである。彼れ泰時一日人に語つて、我れ上人の誨を承けて執權となり、罪戾を免るを獲たるは上人の力なりと云ふ。嗚呼、現代の施政者たるもの少しく上人の訓誨に省み、泰時の爪の垢ても煎じて吞むだならばよからふ。少欲知足は治國平天下の要術である。

三 北條時頼と普寧禪師との相見

北條時頼も亦北條九代中の賢執權として知らるゝ君子人的英雄であつた。夙に禪門に歸入し、靈界の消息に通じた、晩年最明寺入道と稱し、變装して諸國を行脚し、而して民の疾苦を視察し、以て治國の要道に資した。彼れ常に普寧、聖一、道元等の禪門の龍象に會ひ、其が痛棒を喫して漆桶を打破したのである。文應元年支那渡來の禪哲普寧禪師を建長寺に請して住せしめた。一日時頼焼香禮拜して禪師の前に進んで曰つた、弟子大宋に在りしとき、曾て和尚を禮拜す、今多幸にして再び慈顔を拜せりと。普寧禪師は其の話の奇異なるを聞いて、即ち拳を豎起して曰く、

吾れ老ひたりといへども、拳頭硬きことありと。

時頼進んで曰く、

弟子兩年の前夢中に一僧教へて曰く、參禪せよと、醒めて後夢みたる所の像を圖して之を供養す、然るに今尊顔を見れば像と異なることなしと。

普寧の曰く、

暫らく夢を説くことなかれと。

また問ふ、和尚年多少その數いかんと。

普寧曰く、

今年六十三なりと。

時頼進んで曰く、

弟子這箇の年を問はずと。

普寧拳を豎起して曰く、

これ這箇の年なること、莫麼と。

時頼擬議す、普寧乃ち壑くこと三拳せり。時頼欣然として曰く、

和尚の老拳を蒙つて歡喜無量なりと。

普寧曰く、

拳頭の會を作すことを得ざれと。

其の後弘長二年十月時頼山に入り啓して曰く、
弟子近日非斷非常底を見得すと。

普寧曰く、

參禪たゞ見性を圖る、若し見性を得ば千來了百當ならんと。

時頼曰く

和尚方便に指示せよと。

普寧曰く

天下に二道なし、聖人に兩心なし、若し聖人の心を識得せば、即ち是れ自己
本源の自性なり。乃ち面前の蠟燭を指して、巧論妙説す良久して曰く、見
る麼と。

時頼曰く、

森羅萬象山河大地、自己と無二無別なりと。

普寧曰く、

青々たる翠竹、盡くこれ真如の境、鬱々たる黃華、般若にあらずといふこ
となしと。時頼言下に忽然として契悟し、通身汗流る、便ち曰く、

弟子二十一年、旦暮にこれを望む、今一時に満足すと、起つて禮拜すること

九拜せり。普寧禪師御前に於て燒香し、時頼の爲に印可證明し、併せて法衣

一領を付して曰く、

公箇の田地に到ること易からず、宜しく善く護持すべしと。

時に偈を説いて、時頼に授く、其の偈に曰く、

我無佛法一字説、
反亦無心無所得、

無説無得無心中、
釋迦親見燈燃佛、

と。時頼もまた往年夢に見て寫したる像を出して、普寧禪師に贈呈した、乃

て禪師大に喜んでその上に贊を書いて時頼に付與したとある。それより

時頼道行ますます向上し、心術いよく深奥なるを得た、そして自ら剃髮し

て法號を道崇と稱し、世に最明寺入道と稱せられた。

時頼に就いて大政を奉還せよ——道元
時頼茲に又最近新歸朝の清僧曹洞の初祖永平道元禪師の高徳を欽慕し、
鎌倉に招請して新來の禪要を聽きて法味に飽滿せんとて態々使を以て鎌
倉に下向あらんことを請ふた。禪師は元より權門に媚す尊貴に阿ねらぬ
であるから天下の執權時頼であらうとも阿ねつてトク／＼錫をついて鎌
倉へ出かけることは好まなかつた。再三の懇請で隨徒の諫言によつて漸
く道の爲めに起つた而して時頼の請聘に應じて三四ヶ月の間鎌倉に滞在
して禪要を説いた時頼の喜び非常であつた。が併し決して迎合的説法は
毫もない却て時頼に論すに大政を奉還して正道に入れよと勸告された。
時頼一日參謁して教外別傳不立文字即心即佛應無所住而生其心正法眼藏
の奥旨を請問した禪師答ふるに三十一文字を以てせらる即ち左に
教外別傳

四 時頼道元禪師について受戒す

あら磯の波もえよせぬ高岩に
かきもつくべき法ならばこそ
不立文字
いひすてゝその言の葉の外ならば
筆にも跡をとどめさりけり
即心即佛
おし鳥やかかもめともまた見えわかぬ
立てる波間にうきしづむかな
應無所住而生其心
水鳥の行くもかへるも跡たえて
されども道は忘れざりけり
正法眼藏
波もひき風もつながぬ捨小舟

偶作に
斯くして諄々の婆説に時頼頗る省悟するところがあつたので、即ち其の
月こそ夜半のさかりなりけれ

春流高洲岸

細草碧於苔

小院無人到

風來門自開

と、彼れ心中の愉快知るべきである。而して時頼法禮として寺を建て鎌倉
に錫を留められんとを懇請したけれども、袂を拂つてサツ／＼と越前の山
奥へ歸つて仕舞はれた。其後時頼之に代ふるに深厚なる寄進状を贈つた、
けれど清廉高潔なる禪師には一枚の鼻紙ほどにも思はぬてつき戻して仕
舞つた、しかのみならず、それを恐悦がつて受けて来た元明てふ坊主の坐禪
の床下の土を七尺堀つて捨てたとの事である。ア、今時の富貴名利に戀
々たる墮落坊主共から見たならば、ソモ如何なる感をか起すであらうか、荷
くも皮下に血あり、眼底涙あるものであつたならば、慚死せざるを得ない筈

である。

道元禪師は、日本曹洞宗の開祖である。父は久我内大臣道親で、母は攝津原基
房の女である。正治二年正月二日を以て生る。幼少にして容貌雅天資穎悟
眼に重瞳ありて、相者は以て神童と爲した。八歳母の喪に遭ひ、無常を悟つて出
塵の志禁ずるとがてき、遂に十三歳の時都を出て、其親法師を尋ね、進んで出
を告げ、十四歳にて天台座主公圓に就いて剃髮し、そのよりは我々汲々として辨
學し、殆んど台學の奥秘に至つたが、こゝに大疑團の生じて、諸方の教相學者に問
ふも誰あつて、道の疑團を打ち砕くものがない、乃て建仁寺の榮西禪師の門を敲
きて、禪要を學び、榮西没後、其弟子明全と共に入宋し、諸方の知識に參得し、終
りに、天童山如淨禪師に參謁し、千聖不傳の佛心宗即ち禪法を傳へ、安貞二年に歸
朝し、暫く深草に閉居して世を避れ、只管ら聖胎長養せらる。されど桃李言は
ざれど、花時自ら徑をなすて、學博く識高く、徳も亦秀で、しかも新歸朝の名僧誰
れか問はせむべき、深草の佛法著はして、曹洞一派の禪を唱へ出した。遂に
宇治に興聖寺を開き、普勸坐禪の儀、等を著はして、曹洞一派の禪を唱へ出した。遂に
譽ます、佛寺を創建して、鎌倉に留錫せられんとを懇請せられた、しかも禪師は閉

寂を愛して世塵を拂ひて、遠く越前志比の庄の山奥なる永平寺の舊蔵に歸られた、そして天童淨祖の遺訓を奉じて斯山中に在つて一箇半箇を接して、佛祖正傳の大法を斷絶せざらんを期し、世の名聞に拘らず、實に高風清月であつた。曾て後醍醐上皇賜ふに紫衣を以てせられたけれども固辭して受けられなかつた、再三にしてしかも久我家の勸告によつて終にこれを拜受し、時に一偈を打した、

永平雖二谷淺、勅命重重々、却被笑二猿鶴、紫衣一老翁、

といひて遂に生涯身に着けなかつたといふ、高潔清廉かくの如きであつた。建長五年八月二十八日を以て化を遷された、時に年五十有四其の遺偈に

五十四年、照第一天一、打箇跣脚、觸破大千、渾身無一、活陷黃泉一

五 北條時頼と聖一國師との問答

時頼普寧道元の痛棒下に、從前の黒漆桶を打破した。其の後又東福寺の聖一國師が、また鎌倉の龜谷山に住して居られた時に、時頼國師を請して禪門の菩薩戒を受けた。時に國師と數番の商量をした乃ち時頼問ふて曰く、

諸方の説法各々別、或は曰く、妄心縁起して生滅あり
と。或は曰く、
真心不動にして不生不滅なり
と。或は曰く、
大疑の下に大悟あり
と。或は曰く、
學者須く念起を着すべし、之れを回光返照といふ
と。未審かし那個が親しく那個か疏きと。
國師對へて曰く、
這哀は何の所にありて、疏と説き、親と説くやと。
時頼曰く、
豈に方便なからんやと。
國師曰く、

時頼聞いて領き、尚ほ衣を乞ふて曰く、
 願はくば弟子の外護を忘るゝと勿れと。
 斯くの如く、時頼は幾多禪門の龍象に參得し、其が痛棒を喫して以て治國平
 天下の奥秘に入り、心地開發の妙機を得、生死透脱の關涙子を打し得た。乃
 て身は雲水となり、生死悠々去來に任すて、大自在の境界に到つたのであ
 る。而して彼の造詣や、彼の生死交謝の一刹那に於ける臨終觀によつて知
 るを得。

六 北條時頼の生死觀

弘長三年庚亥十一月二十二日戊尅に於て、時頼は最明寺の北亭に於て、身
 に法衣袈裟を纏ひ、禪床に端坐し、從容安然として、末語の一偈を打した。顔
 貌生けるが如くにして、左の一偈生死觀を打し、溘焉として永眠した。曰く、
 業鏡高懸、三十七年、

一 槌打碎、大道坦然

弘長三年十一月二十二日
 と。這個の十六字、彼が生死觀を打し得て至れり盡せりである。東鑑が此
 間の消息を賞揚して、平生の間、武略を以て君を輔け、仁義を施して民を撫す
 るの間、天意に達し、人望に協ふ、終焉の時、手を叉して印を結び、頌を唱へて、即
 心成佛の瑞相を現はす、もとより權化の再來なりと。以て知るべし、彼當時
 の民望如何に深厚ありしかを。

七 北條時宗と佛光禪師

時宗は相模太郎と云へば、我邦三歳の童子も知つてゐる英雄である。時宗
 父時頼の仁慈なる氣風を承けて、しかも關東武士、否日本男子の精華を華め
 て出でたる快男子であつた。時宗幼時は極めて小膽にして、臆病者であつ
 たが、屢々祖元佛光禪師の毒手に遭ひ、痛棒を喫して遂に彼が如き天下無敵
 の大膽者となつたとのことである。

時宗一日祖元禪師に問ふて曰く、
人生の憂苦は怯懦を以て最とす、如何にして之を脱せんか。

禪師曰く、
正に怯懦の來處を閉づべし

と。時宗曰く、

怯懦何處より來る、

禪師曰く

時宗より來る、

時宗怯懦を忌むと甚だし、曷ぞ時宗より來ると云ふや、

禪師曰く、

試みに明日より時宗足下自身を棄却放下し來れ、果して膽坤大の如くな

らむ。
時宗曰く、

如何にして時宗拙者自身を放下せむ。

禪師曰く、

一切の念處を絶て。

時宗曰く、

其の方法如何。

禪師曰く、

只管打坐靜坐して身心の靜寂を期せよ。

時宗曰く、

俗家事務を免れず、光陰の乏しきと如何せむ。

禪師曰く、

行住坐臥、一切の事務これ最良の修善道場なり、是れ只管打坐の道場な

り
と。次に五個條の垂示を蒙つて、愈々造詣を深からしめた。即ち垂示に曰く、

第一、外界の事物に對して全然無頓着なること。外界の事物に對して苟く

も心を馳せ神飛ぶが如きは、それ最も人の氣質をして戦々兢兢ならしむるものなり。此點に於て金剛座上に於ける釋迦の如く、獅子王の歩行するが如くなるべし。常に精神も盤石の如く持ち、世界は只我の外に偉ら

きものなしとは思ふべし。然れども決して他人を輕蔑し、又は他人に無禮を敢てすべからず。常に精神坦然として而かも恭敬を忘るべからず。第二、精神も常に澄水の如く保つべし、精神動搖して外界の事物に頓着すれば必ず其他を忘却すべし。突然の怖畏は此間より生ず、一方に注意すると深ければ、一方の油斷も愈々深きなり、努めて平如として精神を臍下丹田に置くべし。

第三、才略智謀に恃む所あるべからず、恐懼病は才略智謀の設計を現出するの原動力なればなり。其の機に當り變に應じて此心を失はずんば、必ず麗妙なる當位即妙の作略智計を生ずべし。宜しく平常の時と非常の時

と其の心を一にすべし。

第四、勇猛の士氣はよく白刃を踏むべし。柔弱の肢體は窓隙の風をも忍ぶ能はず、宜しく常に勇猛の士氣を保持すべし。

第五、見る所狭小なるときは、其の眼光見識狭小にして膽量亦自ら狭小なり、須らく常に注意して其の心量を擴大にすべし。

と這個祖元の投薬に接して彼れ時宗の怯懦性、臆懼病愈々退治せられ、遂に彼れが如き大膽不敵天魔の膽をして寒からしむるの英雄とはなつた。時

たま／＼西海に元寇の大變即ち兒童も其の聲を聞いて啼を止むてふ蒙古來の慘事に遭逢した當時海内の人心恟々として塔に安ずるものなく。嗚

呼屈せむか我神州は終に彼の臣妾とならねばならぬ、戦はんか粟小の如き我は到底彼れの大なる勝算なきは知れて居る。朝廷百官畏怖して爲す所

を知らざる状態であつた。於是朝廷は諸國の神社佛閣に命じて敵國降伏、國家安全の祈禱を修せしめらる。畏れ多くも龜山法皇は伊勢太廟に御祈

禪師曰く、
 春夏の間博多の邊騷擾せん、——しかも一風纒に起りて萬艦掃蕩せん願
 くは慮とする勿れ、
 と。これ言ふ心は大事に臨んでは決して一點の煩惱の念を頭に浮んでも
 ならぬ、須らく大膽不敵天魔の膽を挫ぐてふ大意志を以て、驀直に突進せよ
 との大鐵案を下されたのである。好箇の鐵漢好箇の快男子、果然果然、此大
 鐵案を下して、遂に彼れ數百の艦艘、十四萬の貔貅を擊碎して、海底の藻屑に
 葬り去つた。これ固より皇室の稜威、祖宗の天祐にもよりたるも、しかしな
 がら苟くも當時この難局の衝に立ちたる時宗にして、卓勵風發、勇斷果決の
 一大鐵案を下して、些の遲疑するところなかつたのも、大に功ありと謂ふべ
 きである。蒙古襲來を聞き、時宗武莊して禪師に見へて曰く、
 大事到來せり、
 禪師曰く、

禪師曰く、
 此時此際、天下國家を一肩に擔ふて、立たざるを得ざる重且つ大なる職責
 にあるものを誰とか爲す、言ふを待たず、時の執權北條時宗である。されば
 時宗の方寸如何に此危急存亡の際に衝つて、一大鐵案を下し、而して大和民
 族が蓋天盖地の大光明を發揮せんかなとは、日夜に苦悶しつゝあつたであ
 らふ。然り、膽斗の如き時宗は、國體の擁護、皇室の尊嚴を保持するを以て自
 ら任じ、斷々乎として彼の無禮を責めて之を追ひ還し、或は刺殺し、こゝに彌
 々大々的決心即ち金剛不壞の大意志を堅めたのである。
 乃ち一日、祖元禪師に謁した、頃は弘安四年の春正月であつた、時宗親しく
 巨福山に登り、祖元禪師に謁して、刻下の大事に就いて問はんと擬議した、
 禪師直下に彼れが來意を知り、筆を執りて、莫煩惱の三字を書して示した、時
 宗直下に問ふて曰く、
 如何なるか、是れ莫煩惱と。

如何が向前せん、
時宗身を躍らして大喝一聲す、
禪師曰く、

真の獅子兒なり能く獅子吼す、驀直に前進して回顧する勿れ、
と時宗拜辭して出づ。實に相模太郎時宗の方寸裡に蘊蓄し、這箇莫煩惱の
三字驀直前進勿回顧の七字は、真に爲さんと欲する所を爲し行はんと欲す
る所を行ひ意志金剛の如く、眼中十四萬の元兵なく、英氣大元四百餘州を吞
む。其の功偉大なりと謂ふべきである。

頼山陽此間の消息を歌ふて曰く

筑海颯風連天黒、
東西次第期吞食、
相模太郎膽如甕、
吾怖關東令如山、
蔽海而來者何賊、
嚇得趙家老寡婦、
防海將士人各力、
直前斫賊不許顧、
蒙古來來自北、
持此來擬男兒國、
蒙古來、吾不怖、
倒吾橋登虜艦、

橋虜將、吾軍賊、
日本刀、

可恨東風一驅附大濤、

不使剋血盡膏、

と何ぞそれ痛快なる。次に大槻盤溪の讀弘安記の詩に

厭海來、來何舶、
欺我神國垂饑涎、
嘗誅使者定民心、
倒檣競入虜艦間、
吁嗟乎轉讀大般若、
何物精誠起神風、
船艦相衝旗蔽天、
陪臣某敢敵王愾、
一掃萬船在度內、
亂刀觸處髻奴殲、
快劍遊戰五龍山、
臣平時宗方寸中、
奉幣諸廟社、
赫々神靈寧助怯懦者、
咄哉蒙古忽必烈、
遣偏裨將驅鼠輩、
快劍遊戰五龍山、
只許三人僅生還、

と然り然り目下焦眉の危場に臨みて、百千の轉大般若も何かせん千萬の祈
禱も何にかせん、たゞこれセツナイ時の神ダノミに過ぎぬ。是時に當つて
は膽甕の如き相模太郎方寸の中にあるのみ。嗚呼偉なるかな大なるかな
禪機の潑辣。

祖元禪師は無學と號す、支那明州慶元府の禪僧であつた、十三歳にして出家し、諸方の知識に參得し、造詣深く、道譽一世に高かつた、宋が既に亡びて横暴なる元兵が禪師の處に亂入し、白刃を揮つて禪師の首に擬して威嚇しやうとした、されど人法二空を徹見し、生死脱離の眞境に在るの禪師は毫も動ずるの色なく、泰然自若として一偈を打して彼凶輩に詠み聞かせた、是に於て流石の横暴なる元兵も此泰然自若の豪膽に恐れて、この尋常一様の凡僧にあらざるに感じて、大に前非を悔謝したとある。其の偈に曰く、
 乾坤無地卓孤筇、且喜人空法亦空、
 珍重大元三尺劍、電光影裡斬春風、
 かくして禪師は亡國の民となつて、時々迫害に遭ひて、東西流浪して居られたが、時にもあれ、北條時宗の亡命僧を鎌倉へ請して、巨福山に住せしめ、自ら弟子の禮を取り、而して政務の餘暇、管只その轡轡に投じて、彼の如き大膽なる豪氣なる、果斷なる大意志をその鐵錘下に鍛錬したのである。

八 北條貞時と一寧一山禪師

貞時には時頼時宗の如き顯著しき事績は見えないけれども、一代の英雄たる價値はあつた。彼は兎も角弘安戦後の天下を一肩に擔ふて、其が執權

となりて國家の料理をなすには、決して尋常凡庸のよく衝り得るところの業でない、然るを貞時能くこの難局に衝つてよく其の職を盡したるこれ英雄たらずて何であらう。

貞時も亦支那渡來僧寧一山禪師に參得して、其が精神修養を爲した、而して時に禪機の活潑々地の妙用を現はしたともある。されば彼れ如何なる訓誨を寧一山に蒙つたか、こゝに其が垂誨の一端を摘示するならば、

さとるといふは別のことにあらず、佛のいましめしことをよくたもち、後にさとれる事なり、こゝらの人のさとるといふは師よく傳へぬる道をしつらへて、をのれらどち、頭と頭とかたむけてこの事、これ宗門の大事、此事を知るを大悟といふなり、知らざるものを凡夫といふなりといひふくめ、扱て此の喜びにあすはいづれくゝの處にて酒飲み美食調へて、心のまゝふるまひ人のよしあし打ち語りしもべのくるしきをも顧みぬほどに、酒にゑひふし、けふよりしては、佛法の一大事は、是れなりと、大名高家在鎌倉に

してありぬるにうちあひて、何を心にうけ得たる事ともなしに、大善智識のふるまひを、古今の書も見覚えて口にまかせてかたりぬれば、厚信なる高貴の人々もまことの佛なりと有がたくきくまゝに、此大善智識調義の位にのぼり、毎日説法し、男女をまどはしぬる間々、本来面目殿に終に近づきならぬ身なれば、くはしくしるべのたづねけるには、大方口と心と身との三のものかはるがはる相違して、目をかさぬるに随ひて、智徳ある俗家に此の三の道より、兵をせめ入れられて、三道さはぎ立つ物からに、かの大將軍の面目殿のおはしぬる本城知れねば、三道の味方の兵一戦にうちまけて、行方しらず落ちて行く時、ありがたかりし善知識賤しき俗人のありさまよしいやまして、つたなくもふびんなるありさまなり。此の如きの僧次第に繁昌して、貴となく賤となく、世をまどはし、みだれん世には、武夫の戦にも、力をそへて、惡逆不道となるべきは、法末の僧なるべし。道心あらん僧は、此の事をはじて、一大事の因縁をたづね、時も日も空しかるべからず。

と、これ固より貞時一個人に向つて説きたるものではない、當時の禪僧を始め佛敎家の弊風を勘破して、其が矯正の爲めの婆説である。けれども、彼の性格を知るに足り、而してこの性格を知つて、其の韞輔に投入して、精神修養に努めたる貞時の偉人を窺知せらるゝのである。

一、寧ろ山禪師は支那の僧で、正安元年に元朝の密使として命を合んで我邦に渡來した偉僧である。當時國交斷絶して互に戰爭した後で、まだ互に警戒嚴なる時であつたが、其の中に立つて孤杖圓々身を挺して敵國にヤツテ來るの如き大膽不敵の傑僧であつたに相違ない。宣統元年、寧一山に授くるに左の如く、寧一山道行素と高し、往いて論さしむべし、商船に附して以て行かしむ、庶幾捕陀寧一山道行素と高し、往いて論さしむべし、商船に附して以て行かしむ、庶幾くは必ず達すべけん。朕特に其詞に従ふ、蓋し先帝の遺志を成さんと欲するのみ、淳妙息民の事に到つては、王其れ審かに之を圖れ云云。元朝の底意は那邊にあつたかは、不明であるが、寧一山禪師は、自ら此重大責任を

負ふて日本に來り、而して日支兩國の和好を修め、日本國民を教化し、禪風を擧揚しやうと云ふの大抱負をやつて來たのである。
時の執權北條貞時は戰役まだ幾ならざる時であつたから、要害堅固に兵備を整ひて警戒嚴重にして居つた所へたま／＼支那僧、殊に元廷の使僧とあるから有無を言はず引き捕へて伊豆の修善寺に拘置した、そして其が舉動を監視して居つたが、一山には毫も異志がないのみならず、道行も高く學識も博い、乃て貞時遂に之を鎌倉に迎へて圓覺淨智の諸山に住せしめ、そして政務の餘暇時々參禪して其の禪要を敲いたのである。

九 楠正成と楚俊禪師

楠正成の誠忠無二なる名臣であつて、而かも軍略智謀に長けたる名將であつたとは古來の歴史を照して彰々たりて、今や三歳の兒童も知る所である。然り、この忠臣この英雄たるもの、不幸にして其の獻策、其の運籌一も朝廷に容るゝところとならず。されど死以て君國に奉ずるの大決心を固め、手兵僅に七百騎を率ひて足利直義五十萬の大兵及び尊氏率の精銳とを敵

手として湊川に奮戦し、刀折れ矢盡きて今や從ふもの僅に七十騎となり、其の身も十一創を蒙つた。もはやこれまでなりと覺悟して、一族十三人郎黨六十餘人廣嚴寺の無爲庵に入つて兄弟互に七生報國の誓をなして自刃した。嗚呼如何なる英雄も時に利あらざれば其が遠大の抱懐も其が蓋世の大材も十分の發揮が出来ないで了るものが往々あるが正成の如きはそれである。されど正成をして斯くの如き偉大なる人格を爲さしめたるものはこれ禪の修養によつて精神生活を爲して來たからである。今其の一例を擧ぐるならば、正成夙に攝州廣嚴寺の明極楚俊禪師に參じて、漆桶を打破し、身心を脱落し、生死の關門を透脱したのである。こゝに禪師に參見したる一條を明極行狀によつて見るに、左の如き記事が載せてある。

建武三年丙子年攝河泉三州の大守、橋姓正成、綸命を奉じ、五月十二日帝城を發し、湊川に到着し、軍旅を當山(醫王山)の麓に屯し、一日禪師楚俊(明極)に問ふて曰く、(是れ史家の取らざる所、今は古傳説のまゝを掲ぐるのみ)

生死交謝の時如何。

師曰く、

兩頭俱に截斷して一劍天に倚つて寒し。

正成曰く、

落處作麼生。

師震威して一喝す、

正成起立して三拜し通身汗流る。

師曰く、

爾徹せり。

正成曰く、

若し來りて和尚に見えずんば安んぞ向上の關振を超出するを得ん、今より代代針芥を失はず。

師曰く、

爾の問酬舊參に下らず平居却て幾箇の宗匠を見來るか。

正成答へて曰く、

某甲少より誠を禪門に傾け、宗乘に探り、一日南都に赴く、路片岡を經一禪者に逢ひ頗る疑ふ所を質す、某甲却進して問ふて曰く、

猶密旨ありやなき麼、

僧の曰く、公の名如何、

某甲答へて曰く、

楠 多門兵衛正成と。

僧正成と呼ぶ、某甲應諾す。

僧の曰く、

這裏是れ什麼の所在なると。

某甲是に於て心中豁然として省悟す、これより後常にこの僧に請ひ、數々慈誨を蒙り、或時某甲問ふて曰く、

道を以て軍に勝つ如何と。

僧の曰く、
至善を兵となすと。

某甲道を服膺して恐れず、この僧故里に歸り、幾ならずして入寂す。某甲道を問ふ、僅に入ケ月餘、只勝縁淺薄なるを恨む。然りと雖も、斯道を會得してより以來、兵を用ふる自在、機に對する無碍なりと。

師曰く、

善哉、多年作家の韃韃に入らずんば、焉ぞ今日の事あらんと。

正成瑠璃殿内に入り、醫王尊を拜して、香火縁を結びて去る。師門送す。明日敵兵海陸競ひ進む、兩陣鋒を交へ、離合十有六回、正成終に當寺(廣嚴寺)の無爲庵に入りて、昆季列坐して自殺す云々と。

かくの如く正成は楚俊禪師の鉗鎚下に生死の關門を排撻して、身心脱落、落身心の境界に入り、其の軍を行るや、能く禪機の活用に出て、至誠以て君國

の爲に殉じたから、萬代青史を輝し、我邦忠臣の模範として、英名竹帛に垂る、所以である。

斯く正成は自ら禪理によつて精神を陶冶し、意志を鍛鍊し、否、生死を透脱したればこそ、其が子孫に訓誡するも亦禪理によつて懇諭して居る、今其の一節を示さば左の如くである。

一〇 正成正行への遺訓

志 不信心にして得業すること難し。予若年より、一心の觀法に心を傾く。或時山中に白雲の横はるを見て、心驚きより、氣前の法を得て、且らく休すと雖も、是れ實義にあらず、故に道の全からむことを欲し、功を費して、身安からず。或時南都春日の社へ詣てける時、其行路に一人の僧の鳩を餌むを見て、吟句して去るに逢ふ。予れ安問七郎を以て、此の僧を呼び返して、先の吟句を問ふ、僧吟じて曰く、
道は其れ不明不暗、歴々として玄妙なり。

予問ふ、如何なるか是れ道。
 僧答へ、天に非ず、地に非ず、物に非ず、佛に非ず、神に非ず、鳥獸に非ず、無情に非ず、人事是れ道。予問、如何なるか是れ人事。
 僧答、善に非ず、惡に非ず、行に非ず、法に非ず、即心是れ正に人事。
 予問、如何なるか是れ即心。
 僧答、君が問ふ心は君が即心、我が答ふる心が我が即心、此心變ぜずば、一切の觸目總て皆道なり、此心變じて思ひとなるを凡と名く。
 予問、尚ほ密議ありや。
 僧曰く、公は名は何ぞ。
 予答、楠多門兵衛正成なり。
 僧正成と呼ぶ。
 予、應諾す。
 僧曰く、是れ何ぞ。

予時に心中豁然として大悟す、
 と是れより此の僧を請して慈誨を蒙る云云。
 此道を授りて、家を起し名を擧ぐると師恩にあらずや。
 是れを以て今此書を汝に附屬す云云。
 汝成長して三寶を敬せざる事勿れ。
 色に耽ること勿れ。
 君臣の禮を亂すこと勿れ。
 諸民を勞すること勿れ。
 軍法を心とせざること勿れ。
 此書を母弟郎黨妻子等に見すると勿れ。
 此期の大意を堅く守りて、天下に名を擧ぐる、是汝が第一の孝行たるべし。
 と斯く諄々遺訓して、遂に七生朝敵を亡すてふ誓言を遺して、湊川の露と消えた。嗚呼、斯の忠臣、斯の英雄の肉團は消散した、されど其の忠魂や義魄や、

否其の精神は七生のみならず千生萬劫にも消えないて後の忠臣愛國者の頭に宿つて時あるとに發揮してゐるのである。偉哉大哉。

明極諱は楚俊支那慶元昌國の人であつたが年五十四の時來朝し。後醍醐天皇の勅願によつて攝州淡川に廣嚴寺を創建して第一祖となし。建武三年九月二十七日を以て洛東の建仁寺方丈にて寂したとある。この廣嚴寺の開山云云に異説あり。廣嚴寺は赤松氏に縁あるも楠氏には何の縁もないと云ふ今はかゝる穿鑿はせぬ。古來民間に傳はりたる廣嚴寺の明極行狀の記する所によつて此に掲げたのである。明極禪師に參見したがド一か未審とするも彼れが軍機の妙用といへ息子正行への遺訓について觀ても幾多工夫參禪の結果生死の關門をば透脱して居つたことは一點の疑ふべきではない。

一一 藤原藤房と關山國師

後醍醐天皇は英邁の御氣象を以て武家政治を取り戻して王政に復古せさせ給ひしも時運到らぬて遂に敗れ、京師は賊軍の爲に蹂躪せられ、あはれ萬乗の御君も笠置の山に落ちさせ給ふた。時に從ひ奉つたものは藤房、藤

秀の兄弟のみ、其の後笠置の山を遁れ、幾多の辛酸を嘗め、天皇を隱岐に移し、奉り、藤房も常陸に流されて白雲萬里の外に在つて勤王の志を寄せ。高時誅に伏するによつて遂に王政復古し、朝廷論功行賞あるに際し、藤房も亦京師に歸り、其行賞の不公平なるを内奏し、且つ屢々諫奏したれども、天皇は遂に納れ給はない。乃て三たび諫奏して納れられざれば身を退くは臣の道なりとの本文に省みて、自ら以爲らく、これ臣としての道に於て至れり盡せり、よしこれより寧ろ身を退きて靈界の福音を樂むに如かずと決心して飄然俗界を去つて佛門に投じた。而して殊に禪門に入つて禪の醍醐味を嘗めたのである。曆應の始つたごろ、花園法皇その離宮を捨て、妙心寺を御開創せさせ給ひ、關山國師を請して開山たらしめ給ふた。時に藤房入つて掛搭し、國師の轡轡に入つて鉗鎚に接した。一日關山本有圓成の公案を授けて參究せしめた。藤房孜孜として工夫參究し、一日豁然として太悟し、直下に國師に投機して所解の偈を作り趨つて關山に呈した。其偈に曰く、

是心一了曾不失 利益人天盡未來
佛祖深恩難報謝 何居馬腹與驢胎

と。關山見て、而して問ふて曰く、

是心何處にかあると、

藤房曰く、

虚空に逼塞す。

關山曰く、

未審何を以てか人天を利益せん。

藤房曰く、

行き到る水の窮る所坐して見る雲の起る時。

關山曰く、

佛祖の深恩如何んが報ぜん。

藤房曰く、

頭に天を戴き、脚に地を踏む。
關山曰く、馬腹驢胎何としてか入らざる。

藤房起つて禮拜す。
關山呵々大笑して曰く、汝今日大徹大悟せりと。彼は斯くして禪の妙域に達し、而して身を行雲流水に托して、到る處青山是れ吾家との見地に立つて、雲水悠悠々去來に任せしが、關山國師入寂の後、妙心寺の請に應じて第二世となり、授翁宗弼と號して、明治天皇より圓鑑國師と諡せられたりと、これ元より史家の異説あるところである。

一二 菊池武時と大智禪師

菊池武時は南朝の忠臣、九州に於ける尊王賤霸の重鎮である。乃ち彼の元弘の亂に西國に勤王の義旗を翻ひして北條氏に反抗し、九州探題を討伐したる勇將である。彼は元弘中後醍醐天皇より畏れ多くも、探題北條英時を誅戮すべき繪旨を賜はつたのである。同時に少武大友の二氏にも同様の繪旨が下つたのであつたが、卑怯にも彼れ少武大友の二氏は變心して北條に味方した。けれども武時纔かに手兵五十騎を率ひ、子息武重

と共に賊將北條英時を博多に攻伐せんとし、元弘三年三月十三日に激刺たる軍機を鼓して進發したのである。時しも櫛田神社の前をうちすぎんとしたれば如何にしけん軍馬は足を止めて一步も進まぬ、すると武時憤然として社殿に向ひ、介ものは拜せず、まして物だたりする邪神に我れ何ぞ下馬するの怯をなさんやと、厥然として箭をつがえて

武士のやたけ心の一筋に
思ひ切るとは神はしらずや

と詠みて神社の扉を射たところが忽にして馬は元の如くに歩み出したと云ふ。これ尋常一様の武士の容易に作し得るところではない、苟くも多年の錬心修道の功を積みたる鐵漢ならては不可能のである。

然り、武時、夙に其が菩提院の大智禪師に參じて、參禪工夫して居つたのである。乃ち入道して眞空寂阿と號した禪師は曹洞門の傑僧であつて、能く寂阿入道の錬心修道の師家となつて、屢痛棒を寂阿入道に惜まなかつた

のである。されば此時此際其が守靜參究多年心膽を鍛錬したる功を著したと謂つても可い。されど惜哉時に利あらず、衆寡敵せず、遂に賊軍の重圍の中に攻められ、花々しく討死したのである。死に臨んで子息武重を呼びて曰ふに、汝速に一度び退陣して、時機を見て再舉し、飽までも朝敵を殄滅して震襟を安んじ奉れよと時に武重如何に父の命令とはいふもの、今目前に父の危急を見捨て、どして獨りオタクと此場を立退かれせうやと暫時躊躇して居つた所が父武時大に怒りて曰く、

汝が日頃の思慮に相違したる返答かな、凡そ小信を守りて大義を忘るは良將勇士の辱る所なり。我は朝家の爲めに命を爰に止む、汝は爰を逃れて節にあたつて命を奉るべし、遲速ありと雖も何れが死を免れんや時移らんとくく

といさめて立退かしめた。乃て武重も熱き涙の袖を拂ひつゝ、遂に其の場を立退るた、後見送つたる父の入道今は思ひおくことなしと、一層勇を鼓し

て敵陣に切り込み奮戦數合にして終に討死した。嗚呼武時入道の勇壯なること、否至誠盡忠なること後事を嫡子に遺訓して訣れたるなどは如何に彼の楠公が櫻井驛の訣別に似たるよ。然り彼れ菊池父子の忠節は決して楠公に劣らぬ否彼れ父子のみでない武重の弟武茂も亦夙に大智禪師の爐鞴に入つて精神生活の糧を得て居つた。即ち彼れ鳳儀山へ納めたる誓の文一節に武茂弓矢の家に生れて朝家に事へまつる身たる間天道に應じ正道の理を以て家名を擧げ朝恩に浴し立てんことは三寶の御許しを蒙るべく候。其外私の名聞利欲に我を忘れ恥をかへりみず諂へる當世の武士の心を永く離るべく候。菊池家は父子悉く大智禪師の門に入つて身心脱落の妙契を得たるのである。されば其が朝家に事へるの赤誠敢て楠公父子の後に落つるものではない。けれども楠公は千歳不朽の名を博し三歳の兒童も楠公の忠誠を謳歌しないものはないのに、菊池武時はあまり世人の知る所とならなかつたのは惜しいことである。开は兎も角寂阿入

道の守静の功參禪の妙趣はなか／＼に造詣なるものがあつた。彼の神社に向つて弓を射かけるなどの大膽さ見識さは實に參禪の功によつて獅子王のそれの如き見識に到つて居らなければ不可能ぬ活劇である、嗚呼偉なるかな大なるかな。禪の修養や。

大智禪師は肥後の人で幼名を満十と稱した、七歳の時村の禪寺に入つて剃髮した。時は師の僧一個の饑頭を取つて満十に與へて問ふに此は何といふものであると、満十答へて云ふ、饑頭と和尚問ふマンチウを喫するとき如何と、満十答へて云ふ、大蛇が小蛇を呑むが如しと、和尚はこれ法師なりとして爾來教養怠らずして遂に一方の宗匠となるに至らしめた、其の師の和尚とは後鳥羽天皇の皇子にして道元禪師の法を嗣いだる寒嚴義尹禪師である。長じて元に渡り、中峰禪師に謁し、其の他諸方の智識に相見したが眞に敬服すべき大徳に違はなかつたと見えて歸朝後或僧の大元に渡るのを送るの儀に莫將日本眞金貴博易大唐鑰子歸とあるに、禪師初は肥後の鳳儀山聖護寺に住して大に禪風を擧揚して居つ

た時に菊池武時就いて禪要を問ひ、後輩として眞空寂阿居士と號し、別に肥後玉名郡石貫村に紫陽山廣福寺を創建し、禪師を請して開山第一祖となし、ますく禪師に親炙して父子共に精神生活の糧を得て居つたのである。

一三 足利尊氏と夢窓國師

人苟くも良心あるものであつたならば誰れか順逆の道理を辨へないものはなからう、殊に苟くも日本民族であつて君臣の分順逆の理を知らぬものはない筈である。されば古來我邦間々史上を汚すが如き亂臣賊子の出づるあるも皆孰れも朝敵と呼ばれ逆臣と言はるゝを恥ぢて、皇族を奉擁するるのである、これ私かに彼等の心内に君臣の分を亂り、順逆の理を誤れるを知るも時の勢止むを得ざるに出づるの跡は窺ひ知らるゝ。彼れ足利尊氏も亦箇中の人である、彼れはトツクに自ら順逆の理を誤り、君臣の分を亂したることは自覺して居つたのである。しかも自覺してなほ改めなかつたのは、彼には一は源家の再興を期待し、一は當時の國狀到底武家政治でなけ

ば治國平天下の實を擧ぐる事が不可能と觀たからである。彼此勢に乗じて良心の指導にあらざる事も成したのであつた、故に彼は常に良心の呵責に遭ふては衷心常に怏々として怡まざるの感があつた、而して彼はこの衷心の不快、良心の呵責を免れんとして、夙に夢窓國師に親炙して精神生活の糧をなして居つたのである。夢窓國師は彼れに慰むるに生死不二、順逆二門なきの禪理を以てし、要する所一身の毀譽褒貶を顧みず、順逆二門を打破し、以て治國平天下を目的とし、濟生利民を計るにありと。かゝる精神生活の慰安と資糧とを得て、彼れは遂に覇業を成したのである。彼は京師で戦ひ敗れて大に意氣沮喪したるとき、夢窓國師彼れを勵まして、雲よりも高き處に出て見よ

なにとて月に隔てやはある

と、彼はこの三十一文字の威力によつて、驟然起つて覇業を成したと云ふ。斯くしく尊氏は國師の訓誨によつて衷心の不快を慰し、胸裡の煩悶を拂

つたのである。今彼が修養の流露を示すならば、和論語に、尊氏の妙義といふとがある、一讀して彼れ造詣の程を知るに足る。即ち妙義に曰く、
 たとへば人時に乗じ、その勢は張良を欺き、樊噲を蔑に思ふとも、つねに三寶を敬ひ、吾神明の教へを守らぬものは、たとへ運強くとも、一世二世までも保ち難し、愚なりとも信心あるものは、運つよし。賢くて勇ありとも、不信心のものは、運更になし。悲哉。勇なるものが己が纒の勇に迷ひて、神明が護りあることを知らず。
 慈悲正直、思案、勘忍、和合を城郭となし。油斷過奪、諸遊を大敵とせよ。
 と惜哉、彼れはかゝる心要を得、かゝる修養せしにもかゝらはらず、一朝の運勢に乗じて、止むに止まれぬ仕儀なりとは云ひ、自ら順逆を誤り、逆臣の巨魁と後世の史籍を汚すに至りたるは。

夢窓國師は名は疎石と號して、世に七朝の國師と稱され、南北兩朝に歸仰せられ

一四 細川頼之と通幻禪師

たる高徳である、殊に尊氏の歸信厚く天下統一の後、尊氏後醍醐天皇の冥福を祈るべく、天龍寺を創建して、國師を請じて開山第一祖と崇めた、國師は當時の紛たる俗情に關せず、超然として世外に出て、専ら道を修して居られた。性質温雅であつて、自然に物を感ぜしむるの徳あり、故に上王公より、下士庶人に至るまで、一たび國師の音容に接するものにして、讚仰せざるものはない、當時京師、林の牛耳を取つて居つたのである。惜しくは國師の眼、南北兩朝を偏視せざる爲めか、彼れ尊氏をして、順正にかへらしめざりしとを。却て其の高弟の義堂和尚は、將軍義満が政治の要を質せしに答へて、萬一天下に變あらば、天下を棄ること永平長老(道元禪師)の平氏(北條時頼)に勸めたるが如くすべし、以て安樂長久ならんと云ひて、暗に大政奉還を勸誘したるの意氣は賞すべきであらう。

鎌倉覇府崩壊すると共に、彼れ頼朝より北條數代に於て扶植したる堅實なる武士の風儀は、地を拂ひ、節義類廢し、士道地に墮ち、朝に南朝に屬し、夕には北朝に往き、たゞ所領の多きを望み、行賞の豊なるを希ふものゝみとなつた。此時に當て、細川頼之あるは、實に萬綠叢中紅一點の觀がある。彼れは

夙に此の士風の頹廢を憂へ之が改善を以て自ら任じて居つた。而して足利義満を教養したが、奢侈豪華なる義満到底士風挽回の範を垂るの器でない、ますます士風を亂すのみである。是に於て流石の頼之舉世滔滔々名利の爲に争ひ権力の争奪に汲々たるのみで、我が理想の遂に行はれないのを慨歎して、

人生五十愧無切

花木春過夏已中

満室蒼蠅掃難去

起尋禪榻臥清風

と吟じ而して遂に世を遁れて丹波に入り、髪を剃り衣を染めて世外に超出した。夙に通幻寂靈禪師に參じて禪要を問ひ、法名を常久と號した、後に丹波に永澤寺を創して禪師を請して、常に此峻烈なる通幻禪師の提撕を得たのである。

通幻禪師は永平第三祖にして、一代の宗匠であつた、機鋒峭峻にして棒頭忽にし

ない、而して多くの龍象を打出して後世洞門に通幻派の一派を爲した。今洞上聯燈録によりて、末後の消息を觀ん明徳二年四月末、疾を示す、未の刻大衆を召して垂説して曰く、我が滅後汝等諸人、當に諸縁を屏息して一大事を究明し、洞上の玄風をして地に墜ちざらしめよ、若し文字言句、名聞利養に執着せば吾が徒にあらざるなり。時至れり、吾其れ行かん。と。一衆遺偈を請ふ、「算計甲子、滿七十年、轉身端的、兩脚踏踏天」と筆を擲て逝す。と何ぞそれ臨終の善言警句、後人をして奮起せしむるの概ありや。

一五 蟻川親當と一休禪師

蟻川親當は、通稱親左衛門と云ひて、足利將軍義教に仕へたる武士であつた、政府の公役を勤め、右衛門の少尉に任ぜられた。彼れ亦文武兩道に達したる一代の英雄であつた、殊に其の和歌の如きは洒脫風流獨特の妙に達し、世に集外歌仙と稱さるゝ一人である。夙に一休禪師に參じて不立文字の禪理に造詣し、佛祖不傳の妙域に悟入したる傑物である。一休和尚といへば三歳の童兒も知るところの洒脫滑稽を以て生涯となし世に一個の洒落

法師と目され、其の衰するものは生如来と稱へ、貶するものは頓智坊主と呼べる甚深の禪理を諧謔的に極めて平易に直入的に社會に流布したる活禪師活佛であつた。禪師は畏れ多くも後小松天皇の御落胤だと稱せられて

る。
當時の禪僧は多く足利末葉の義持義教等の風流華奢に狎れて皆貴族的に偏して其の弊風の極に達したのである。此時に當つて、一休禪師は獨り金枝玉葉出にあつて、平民的に禪風を擧揚し、足利の末葉を諷警したのである。時に蝮川親當とは斷金の友であつて、共に往來して滑稽洒落的に禪要を商量し諧謔の中に自ら禪味を飽滿したのである。

○蝮川親當參禪の動機

親當或夜鳥邊野を過ぐると、深更人なく四隣閑寂として虫の音も絶ゆるてふ丑滿つ頃、一人の女人、茶毘の火に向つて端坐し、些の恐怖の念もなきものゝ如きやうすであつた。流石の親當も薄氣味悪くつてたまらぬから泣

はこれ何物なればこそこの深更にたゞ一人かくの如き所に居るぞと咎めると、彼の女人の曰ふやう、

夏蟬のもぬけはてぬる身となれば

何がのこりてもものぢをせん

とやつたので、蝮川ますく驚天して、これは逆も禪道に入りて見性悟道の妙域に達せんければ、この一婦女子に及ばぬことの悲しさよと自ら悔謝して、それより普く五山の宗匠に參見し、諸方の禪師に參叩して、僅に入頭の邊量に逍遙して居つた、一日當代の活禪者一休和尚を山城の酬恩庵に訪れて、彼が洒落の活禪を敲いた時、一休和尚慕直に問ふて曰く、

什麼の處より來る。

親當曰く、

和尚の國より來る。

一休和尚曰く、

甚麼の事かある。

親當曰く、

鴉は鴉鳴を作し、鵲は鵲噪を作す。

一休和尚曰く、

此外更に有ることなきか。

親當曰く、

吉野の櫻花、今正に盛なり。

とやつた、乃て和尚も、こいつは少しく話せるやつてあるわいと、氣機相投じ

たものであるから、まづ茶をついですゝめて、且つ曰く、

何をかな參らせたくは、おもへども

とやつた、か親當さしおかず、直下に謝して曰ふ、

一物もなきをたまはる心こそ

達磨宗には一物もなし

本來空の宗旨なりけり

と。これより一休和尚を師として、朝參暮請、參禪辨道して、遂に髮を剃りて、法號を知蘊居士と號した。是れより師資の道交ますく、厚く、その一揆一擲、常に滑稽洒落にして、其の間自ら見性悟道の妙味を感ぜしめたのである。一日和尚に、蛇川親當問ふに、邪正一如、空即是色、色即是空を以てした、すると一休和尚直ちに和歌數首をものして答へた、

邪正一如

生れても死ぬるありけりおしなべて

釋迦も達磨も猫子もしやくしも

空即是空

白露にその姿は、そのまゝに

色即是色

もみぢにおけるくれないのつゆ

花を見よ色香もともにちりはてし

心なくとも春は来にけり

と。又佛道の大意如何と問ふに答へて

佛法はなべのさかやき石のひげ

繪にかく竹のともづれの音

となほ此外に一休和尚と蟻川親當との道交は、彼の道歌問答を見れば益するもの多くあるが、今は煩はしければ略することとする。

一休和尚は宗純といひ、幼名は千菊丸と稱して、後小松天皇の第二皇子であつた。母藤原氏は宮人疾視に遇ひ、讒せられて、娘める身を抱へて民家に遁れた。乃ち千菊丸は民間草莽の中に呱呱の聲を擧げたのである。されば梅檀は二葉より香く、蛇は寸にして人を呑むの氣ありて幼より類悟、一を聞いて十を知るの神童と呼ばれた。六歳にして安國寺に投じて長老鑑公の爲に童子の後を執り、名を周健と改め、十二歳、清叟仁藏主に寶幢寺に調して維摩經を聽きて、其の深旨に達し

た。十三歳出でて、慕結攀公に就いて作詩法を習學した。年十五にして既に大人を凌ぐの金聲玉振を發揮し、人をして驚歎せしめた。されど彼は決して一時一人として満足するの兒でない。當時五山の禪僧等を初め諸宗の僧侶が徒らに氏族門閥を誇り、顯貴に媚び、權門に阿ねり、眞實の佛法、地を拂ふに至るを慨し、這箇の類廢せる僧風を廓清し、塵地の佛法を回生せんとの大心を抱いて居つたのである。乃ち未だ弱冠にして既に憤慨措く能はず、左の二偈を賦して慕結翁に呈した。其の偈に

説法説禪舉姓名

辱人一句聽春聲

問答若不識起倒

修羅勝負長無明

犀牛扇子與誰人

姓名議論法堂上

恰似百官朝一茶

行者虛公來作賓

姓名議論法堂上

翁之を慰諭して云ふ、方今叢林の類甚しき、到底一柱の能く支ふる所でない、少しく忍べと。二十二歳、江洲堅田に赴き、時の名僧華叟宗曇和尚に講して心を明めんと請ふた、所が華叟和尚亦尋常の師家でない、一休の來るを見て、門を閉ぢて拒絶した。されど一休も亦流石のもの、これしきの芝居に墜して、門を閉ぢて退却するやうな凡漢ではない、露眠草宿して門側に危座して一歩も退く氣色はなく、已に五日を経た、其の日華叟和尚村齋に招かれて行かうとして門を出て

二〇
恣にし、呑噬を是れ事とし、獸行耻とせず士に操行節義の見るべきものもなく、干戈倥偬天下擧つて修羅場の巷衢となつて仕舞た實に弱肉強食の暗黒時代となつて仕舞つた。此時に於て獨り頭角を現はし、所謂沙中の蒼玉として、人格の敬慕すべきものは、唯太田道灌あるのみである、彼は關東武士、否日本武士の資格を失墜せざる英雄であつた。然り、吾人に少しく彼が爲人の一隅を語らしめよ。

道灌は法號にて、本名は持資、初の名は資長と、上杉氏の臣太田資清の子である、幼にして既に容貌魁偉且つ穎悟にして大膽であつた、即ち九歳にして學校に入り、十一歳にして能く文を屬したりと。子を見るは親に如かずて父の資清が會て誠めて曰ふやう、汝容貌魁偉穎悟にして大膽なり、此の如くにして禍なきものは少し。汝言行勉めて慎戒を加へよ、見ずや板橋直ければ則ち立ち曲れば則ち倒ると道灌直ちに屏風を掲げ來つて問ふて云ふ、直ければ則ち倒れ、曲れば則ち立つ如何せば可なると。流石の資清も即

答するとが不可能ぬて、私かに彼の前途を氣づかつた。資清また驕者不^か久の四大字を書いてこれを壁に掛け、道灌をして之を讀ませて問ふて曰ふ、此の意如何と、道灌答て云ふ、小子願くは一句を添ふるとを得んと、乃ち不驕又^ま不^か久の五字を書いた、資清怒て扇を以て道灌を打つと。彼れ長じてます、^く勇に誇り、武に驕り、且暮山野に畝獵をこれ事とし、甚だ野卑粗暴であつたが、中年に及んで文學を嗜み、心的修養に志したる功によりて以前の氣風人格は全く一變した、これ文學及び宗教の修養の賜である。今其が文學的方面について彼の造詣を窺ふならば、彼は博く和漢の書を涉獵せば、言ふまでもなく、殊に彼の趣味は和歌に於て顯れて居る、或は云ふ彼れは最初武辨一方の木強漢であつたが、一日武藏野原に出獵の時驟雨に遭ひて路傍の倭屋を訪れて、簀を借らんとしたるに、二八の小女へ取敢えず一枝の山吹の花を献げて、七重八重花は咲けども山吹のみ一つだもなきぞかなしきとの古歌を詠めるに遇ひて、道灌何のいらへも不可能ず、大に愧ぢ、其より歌

道に志し文學を嗜むに至つたとこれ固より俗説にて取るに足らぬがし
かし彼れは或機會に遭遇して少青年の時代とは一變化を來たしたとは争
はれぬ。こゝに彼れが和歌について二三を掲ぐるならば如何に彼が斯道
に造詣せしかを知るに足る。乃ち寛正五年道灌京都に上りて將軍義政に
見えた時に後土御門天皇に於かせられて詔りして武藏野を問ひ給ふた
道灌三十一文字の歌を作りて答へ奉つた、
露あかぬ方もありけり夕立の
そらより廣き武藏野の原

と更にまた隅田川の都鳥は如何にと問ひ給ふに
年ふれどわれまだしらぬ都鳥

隅田川原にやどはあれども
とまたその風景は如何に問ひ給ふに
わが庵は松原つゞき海近く

ふじの高根を軒端にぞ見る
と答へ奉つた天皇歎感斜ならず其の詞藻の豊富であるを嘉賞し且つ御
製を賜ふた
御製

むさしのはかるかやのみと思ひしに
かゝる言葉の花やさくらむ

と嗚呼彼れ草莽の微臣にして畏くもかゝる御嘉賞を蒙るのみならず御製
さへも賜はる真に無上の榮譽と謂はざるを得むではないか。

かく文學的趣味によつて或程度までの精神生活に資したる上に更に禪
的修養を加へてます。其が人格を高からしめ而して事に臨んで順逆縦
横擒縱與奪自在の活機を爲すの英雄を作りあげたのである所が高木は風
に妬まれ出る釘はうたるるの哩諺の如く遂に主人上杉定正の疑懼すると
ことなり粕屋の弟に招がれ浴室に入つたる所を刺客數輩の爲めに殺され

た。(彼定正暗愚にして人を見るの明なく、山内上杉顯定の讒言を信じてこの文武兼備の良將を失つたのである嗟惜哉)
彼は夙に曹洞臨濟二門の尊宿に參見して法喜禪悅の甘味に飽滿して居つたのである。殊に龍穩寺(下總)泰雙妙康禪師に謁して禪要を問ひ、數々痛棒を喫したのである。又城南に萬年山青松寺を創建し、雲岡舜德禪師を請して開山第一祖として參叩怠らなかつた。而して祖道の奥底に參究し、生死透脱の禪要を了じ、生也全機現死也全機現の活作活用を得るに至つたのである。是即生死の羅籠を裂破して遊戯三昧に入つたのである。今その一例を擧ぐるならば、道灌一日雲岡舜德禪師に參見した時に、禪師道灌をして瑞巖主人公の話を看取せしめた、それより道灌這の公案を工夫參究すること二年、されど中々以て入頭の邊量にも及ばなかつた。一日越生に遊びて途中にて一人の客の大悲の靈跡を巡拜するの逢ひ、乃て旅行は道づれば、なさけとやらて遂に道づれとなつて二人で互に所思を話しつゝあつたが、

時に道灌より問ふて曰ふ、
何れの處の人ぞと。
客曰く、
京師なりと、
道灌曰く、
彼の中の山川此間と孰れぞやと。
客曰く、
唯だ鐘聲のみありて異るとなしと。
道灌是に於て倏然として省悟するところがあつて、直ちに歸つて雲岡和尚に謁して所解を呈した、和尚曰く、
即今主人公那裏にかあると。
道灌曰く、
山は月樓の鐘に答ふと。

和尚乃ち之を印可すと。

斯くして道灌は多年實參實究の功によつて遂に漆桶を打破し生死の關門を透脱して身心脱落の境界に入つて居つたのである。されば彼は不幸にして彼の讒者の舌鋒に遭ひ入浴場に於て刺客の爲めに刺さるる時、即ち生死岸頭に立つの刹那に於て神色自若として右手に槍幹を抑へて、辭世の歌を詠んだ。即ち

昨日までまゝ、妄執を入れおきし、

へんなし袋今やぶれけむ

と。又或書には左の如く詠んだとある

かくてこそさこそ命の惜しからめ

かねてなき身と思ひ知らずば

と、これ眞に生死岸頭に立つて兩手撒開底の活作略と謂ふべきである。多年實參實究の漆桶打破底の鐵漢たらずんば、曷ぞよく彼れが如き活作略を

演ずることを得んやである。

一七 武田信玄と快川國師

武田信玄は戰國時代の豪傑で、殊に軍學兵法に精通し、攻城野戰に妙を得織田、豊臣、徳川、上杉、今川、毛利、北條の諸豪傑を呵睨して、彼等をして震慄せしめたる英雄であつた。彼は夙に慧林寺の快川國師に親炙して、禪要に參じて、其が精神生活をなして居つた。快川紹喜禪師は甲府慧林寺の住僧で、濟門の龍象である。機鋒峭峻にして、氣宇高快、清廉潔白の高僧であつた。武田家が織田信長に亡ぼされた、信長快川國師の高徳を聞き、請して法要を問はんとした。國師は儼然として拒絶し、信長の意に隨はなかつた。所が例の短慮なる信長は猶豫もあらせず、無慘にも火を放ちて慧林寺を焼き拂つた。時に國師は隨徒を百餘人を率ゐて山門樓上に在り、端坐して動ずる色もなく、焰々たる猛火は紅爛の舌を捲きて今や一嘗にせんとするの勢であるも、泰然自若として安住不動如須彌山とし、しかも隨徒に向つて垂語して曰く、諸人即

今火焰裡に坐して如何が法輪を轉ぜん各一轉語を附して末後の句をなせ
と衆皆下語す禪師即ち唱へて曰く

安禪は必ずしも水を須ひず心頭滅却すれば火も亦涼し

と遂に火定に入つて灰燼と化して仕舞つた。正親町天皇其高德を聞こし
召し賜ふに大通智勝國師の徽號を以てし給ふと。

信玄はかゝる自重自尊峻嚴犯すべからざる高德に歸依して其の提撕と

を得て心地開拓の鋤鋤を受けたのであるから彼の造詣や知るべしである。

今惜哉信玄と國師との相見問答の如きは得て見ることが不可能だが彼

の家法によつて略ぼ其の造詣の如何を窺ふことが可能甲陽軍鑑に信玄

の家法を掲げてある曰く、

一 戰場に於て聊か未練なかるべからざる事莊子に曰く生を必ずすれば必

ず死し死を必ずすれば生ずると。

一 毎邊虚言すべからざる事。

神記に曰く正直は一旦の依怙にあらずといへども終に日月の憐みを
蒙むると。

一家中の郎徒に對して慈悲肝要の事。

三略に曰く民を使ふ四支の如しと。

一 參禪なすべき事參禪別に秘訣なし唯生死の切なるを思ふのみ。

一 善惡よく正すべき事。

三略に曰く一善を廢すれば則ち衆善衰へ一惡を賞すれば則ち衆惡歸
すと。

一 神佛信ずべき事、

曰く佛心叶へば時に力を添え横心を以て人に勝てば露はれて亡ふべ
し。傳に曰く神は非禮を享けずと

一 隱居の時その子の力を假るべからざる事。

碧巖に曰く榔標横檐人を顧みず直ち千峰萬峰に入りて去る又曰く是

非を犯し來りて我を辨ずるなし、浮世穿鑿相關せず
と、以て彼の造詣彼の人格の如何を知るに足る、彼れが如何に快川國師の鉗
鎚下に漆桶を打破せしかを彼れ其の生死交謝の一瞬間に當つて、大抵還
他肌骨好、不塗紅粉自風流と、以て其の性格の如何を見ることができる。

一八 上杉謙信と宗謙和尚

信玄の名を聞くものは必ず謙信を想ひ起すであらう。これ謙信と信玄
と實にこれ戦國時代を飾るべき好英雄であつて割據群雄中の龍虎であつ
て多年信州河中島に於て雌雄を争ふたる活劇を演じたからである。
而も謙信の戦は常に義侠に起つて正々堂々たるものであつた、敵將の死
を聞いてア、好敵手を失へりと箸を投げて慨歎したりと、何ぞその豪快にし
て任侠であるよ。されば、信玄も亦其死に臨んで、其子勝頼を戒めて曰く、熟
々天下の英雄を通覽するに方今唯一の謙信あるのみ、吾死せば汝宜しく救
ひを請ひ國を以て彼に托すべし、彼一たび諾せば汝また後顧の憂なかるべ

しと言畢つて瞑すと。嗚呼、これ即ち賊は賊を識り、英雄は英雄を知るとい
ふてあらう、生前相戦ひ相争ひ、死後托するに遺孤を以てす。これを見ても
謙信の人格如何を知るべきである。彼れ若冠にして既に天下を経綸する
の大志を抱き、起つて北陸の覇者となり、關東の管領を襲ひ、意氣衝天の勢
を以て、一たび上洛して皇室の式微を慨し、今や北陸の原野に信長と雌雄を
決して、二たび上洛して以て尊王の大義を唱へんとするに當り、不幸天下の
健兒に年を假さず、天正六年三月十三日、俄然病を以て陣中に卒した、時に彼
生死岸頭に立つの一刹那にして左の偈を遺した、曰く、

一時榮辱一杯酒、四十九年天地空、
今而不問死生境、歲月匆匆短夢中、
一期榮華一盃酒、四十九年一醉間、
生不知死亦不知、歲月只是如夢中、
と、國詩一首あり、

極樂も地獄もともに有明の

月ぞ心にかゝる雲なき、

是に由つて之を觀るに、謙信の彼れは實に遠大なる希望を有し、蓋世の小心を抱懐し、今や將に其の途に上らんとするに當りて、敵前近き陣中に没せるにも拘はらず、臨終の態度や胸中洒々落落として、些の怨恨あるを視ず、心にかゝる浮雲さへもなく、其の心境の清絶なる、從容として迫らざる態度は、眞に彼れ生死を超脱し、金剛不壞の大安心底を獲得したるを見る、其の禪理に造詣せし決して尋常一様でないことが窺はるる。
謙信幼名を虎千代と云ひて、長尾爲景の第四子である。幼時林泉寺の天室和尚について教養された、壯年に及んで叡山に上つて台學を研究し、大に精神の修養に努めたのである。それより數々諸方の禪僧に參見して、禪味を咀嚼し、心膽を鍛鍊して、還御自ら春日山の城主となつて、一日微服して大衆に混じり、天室和尚の法嗣益翁宗謙和尚の轡轡に投入して、生死の關門を敲

き、達磨不識の公案を打して生死透脱の眞境に悟入したのである。乃ち宗謙和尚謙信の見地を試みんとして、先づ大衆に向つて達磨不識の話を舉げた、衆僧各下語して決戦、酬なるに至つた時に、和尚謙信を顧みて曰く、
達磨不識の意旨、什麼生か會すと、謙信遂に答ふるとが、不可能なかつた、乃て和尚曰く、

太守尋常口吧地たり、這裡に到つて、什麼としてか説破せざると、
謙信惘然として汗を流して始めて、慚服した、
和尚曰く、

此事相應を得んと欲せば、直に大死一回し始めて得べしと。謙信退いて工夫參究すると、數月にして豁然として大悟し、爾來獨考怠らず、遂に心要を得るに至つて、髮を剃り、宗謙の謙字を貰つて、謙信と號し、其の公案に因みて不識庵と號せりと、一説に謙信顯聖寺九世甄室門察和尚に參じて、此達磨不識の話を舉げて、遂に契悟し、薙髮して謙信と稱し、不識庵と號したとある、是

は顯聖寺の舊起に不識庵真先謙信大庵主とあるが、かく幾多の禪門の老賊に參見し其の痛棒を喫して漆桶を打破したる彼れは其の機略縱横殺活自在の境に進み、膽力の豪快なる用兵の神出鬼没なる、皆これ大死一回して以て心要を得、而して禪機の活作活用に出でたるものと謂つべきである。嗚呼、偉なるかな。

一九 大内義隆と玉堂和尚

大内義隆は義興の長子である。夙に勤王の志あり曾て後柏原天皇の即位の資を献じ、詔して太宰大貳兼兵部二位として昇殿まで許されたるが、文武の兩道を兼ね、併て佛乘に歸依し、朱註五經や大藏經を朝鮮に求め、國內に幾多の寺院を建立して、八宗の高僧を集めて法要を問ひ、殊に龍福寺の玉堂和尚に參じて見性の直路を參究し、而して生死不二の真境に悟入し得たのである。されば彼れ生死岸頭に立つて、玉堂和尚に法問をなして、悠悠せまらず自若として死に就きしを見ても、平生に於て佛乘に深入し、禪的修養によつ

て、心膽を鍛鍊し、生死の關門を打破して居つたところが知らるゝのである。于茲少しく此間の消息を見る爲めに、先づ大内義隆と玉堂和尚とのせつばを摘載しやう、それは彼の後太平記に出て居るものゝ一端である。

太寧寺へ御出であり、風呂に行水めされつ、和尚に參會申されて御物語りの中に、龍福寺の玉堂和尚に久敷せつばを請ひ申し、八境界はとをして候ぬ。三境界の分は覺えず候、右様の事も今日に至りては、成らせられざる事にて候、臨終の間には無念想に住すべきことこそ肝要にて候やらむ。宗々の源を少々伺ひ申様に候、先づ天台の心は四教五時の經文について、一念三千の幽義を顯し、三諦圓融の義を以て、一心の心底を究め候、華嚴宗の心は法性緣起を建立し、圓融無礙の法門によりて、生佛一體の覺悟をなし。真言宗の心は六大に於て一具多身の六大法位の六大を建立し、源を無相表位と談じて、無相をきらひ候、十住心を以て宗々建立の時、も真言不思議なれば、餘教超絶の宗偶と申して三國に用ゆる意殊更天竺

には眞言一宗にこそぞれり、されば秘法なれば、是はうかゞひ申すにたえたり。扱て淨土の心は彌陀の超世の悲願には、攝取不捨の誓ひ、他力本願往生の誓願にて、一念に彌陀を念ぜば、自力によるべからずと立て、かやうに事に心をかけ常に窺ひ申も候も、此度の様なる觀念こそ候へ。何れの宗も一心の源を一大事とこそ立てたる事て候へ。儒道の心も虚無の一たりと其源を顯し候へども、世間の空は空にして無也、出世の空は空にして眞也と釋し。神道の心も陰陽の二つは天地の二神即ち赤白二陽稱合すれば、國常立尊一心の根本となり。火穴一虚火源尊神と申候へば、一滴の露を捧げば、父母所生の源底をわきまへ。寒熱のはだへにふれては、未生の已前の本源を知ると聞く様に候程に、悟りの道は色々に取りよる方に候へどもをちつく所は同じ雲井の月を見ると申様に候。又弓矢を取り戦場に入りて切りまけ候へども、自害に及び候事侍の本分に候。夫は此世の迷の上におきて國の爲め家の爲めと申事は、輪廻

の業因と覺えて候、其時は此世は夢幻の間にて、來世の事は億萬劫ともなき事にて候也、斯様になることと思ひまはし候へば、天道のはからへにて先世の因果のつもの來りて、我身の上にはまはしを知らずば、愚痴の迷人の故にてあれば、誰人を恨みんとはなかりけり。因果は十二因縁の生死流轉の事なれば、臨終の所こそ一大事にて候ひけれ。無念無想の元理に住し、華藏世界に至らんと思ふ候はいかにとたづね申されければ、和尚の返答に、仰の如くに此世界に生れ候へば、三毒を以て心とし候程に、佛の世よりも瞋恚ありて、帝釋修羅の戦ひ、敵味方の戦場これあることに候、誠に合戦の勝負によりて、あくれをとりにては、或は我身に刀を立て、又首を刎ね、海に沈んで亡魂となり、怨靈となるとはたへより聞くことにて候へども、此の如くの輩は何れも修羅道に落ちて、獄卒の苦患をうることに候。斯様なる事は申すに及ばず。知しめされたる様に聞えて候。宗々の觀

念に入らせ玉ふことこそ有がたく候へ誠に臨終には無念無想の心になりたまはんこと佛祖不傳の處も只此際にてこそ候へきと申されば聞信じ三拜ありて御弟子にならせたまひ法名瑞雲珠天とつけ云々。斯くて皆佛殿に座を連ね曲祿により西に向つて跏坐して觀念に入り、一首の辭世をのこして大内一族皆共に生害しぬ。辭世の歌に

討つ人もうたる人も諸共に

如露亦如電應作如是觀

と以て其が平生の修養參叩怠らざりしを知るべきである。

二〇 前田利家と大透和尚

前田利家は北陸の重鎮たる金澤の藩祖で英邁剛武能く人を容るの度があつた蒲生氏郷が太閤死後天下に宰たらんものは予にあらずんば彼れなりと識言せしほどであつて秀吉も死に臨んで幼冲なる秀頼を托して豊臣家の興廢を彼れに委せしめたるに見ても寧ろ家康以上の人物であつた

のであらう然るに彼の不運か豊臣家の不幸か秀頼七歳の時(慶長四年三月三日)此の大任を放棄して逝いて仕舞つた。是に於て彼れ老翁なる家康が秀吉の委託を顧みず豊臣家滅亡の詭計を逞ふするを得たのである。家康の好運なる兎も角天下に覇たるとが得られたが若し利家氏郷の如き豪雄が存命であつたならば到底天下は家康のものとはならぬかつたであらう。されば家康天下を掌握しても前田利家の百萬石には指をも付けなかつた。此れに由つて觀ても利家の偉大なる英雄であつたとは知らるゝてあらう。而して利家は元より文武兼備の名將であつたが其の上に宗教的修養によつて能く其の性格を完成したのである。今洞上聯燈録の記する所を見るに彼は軍務の餘暇には諸方の名僧知識を城中に屈請して宗要を劇談して精神生活を爲して居つた時に曹洞の碩徳大透和尚と云ふがあつて越前の太白山に住して居つた利家屢々此の大透和尚について禪要を問はんとして太白山に遊んだ一日捷徑を指んを請ふた和尚曰く此事唯念々捨てず

して久々に純熟して時節到來せば自然に證入せんと。而して和尚靈雲桃花を見るの話を擧げて時々に工夫參究せしめた、一日公和尚と同じく法堂に經行して居つたたましく童子が庭前に趨つて吟して曰ふ桃花は細に楊花を追ふて落つと和尚公の背を拊して曰ふ好しと是に於て公豁然として黙契したとある。これによつて公の法名を桃雲院殿淨見大居士と號した。彼れはそれによつて心要を得、平生其の心術の周到なる

天下有道則見天下無道則隱能謀者慮未萌
智者千慮必有一失愚者千慮必有一得
と云ふ語を一枚の紙に認めて之を懷にせしめたと云ふ。彼れ加越能三州を領して徳川家眼の上の一の瘤視せらる。

二一 伊達政宗と東嶽和尚

政宗は仙臺藩祖にして六十四萬石を領じて奥羽の重鎮となつた、勇略當時の群雄に冠絶したるのみでなく又文學の才もあつた、幼名を梵天丸とい

ひて夙に臨濟の碩徳虎哉和尚に參叩して心要を究明した。虎哉和尚の死後、東嶽和尚に師事して屢參見し仙臺に瑞鳳寺を創立して和尚を請して開山第一祖とした、又松島の瑞巖寺に當時道譽の高き雲居國師を招聘しやうとしたなど、其の心要を究め心性の修養に怠らなかつたのである。彼の信仰は不動明王であつた、明王が面には憤怒の相を現はし、内心に慈悲の愛を蓄へて居らるゝを感得して、苟くも武將たるものも亦よろしく斯くの如くなるべきである、即ち外には勇武絶倫の相を現して内には常に慈悲の仁愛の心を失はないで、そして物の爲に心を動かさないやうにせんければ、乃ち彼れ自ら不動明王の權化なりとの自信を持つて居つたのである。てあるから彼れは心の動かざるを修養の目的としたのである。曾て太閤秀吉から非常に珍らしい茶器を贈られた、公大に珍重して其茶器を玩んで居つたが過つてこれを落して心大に驚いた、時に彼れ思惟ふやう、我れ苟く

も奥州の太守として如何に珍器なればとて一の茶器位何かあらん、これが爲に心を動かすやうては豈に武將として否、奥州の重鎮となるとが可能やうかと云つて茶器を石に抛つてそれを粉微塵に碎いて仕舞つたと云ふ、彼が心的修養に努むると概ね斯の如くである、以て其の造詣の程知らるゝてあらう。彼曾て耶蘇教の跋扈を憤り、彼の事情を偵察しやうとして羅馬法王に使を遣はし、自ら南蠻を遠征するの大志を抱いて居つた、即ち歌ふて曰く、圖南鵬翼何時展、久待扶搖萬里の風と。彼れ亦一代の豪傑たり得るものと謂ふべきである。

二二 柳生但馬守と澤庵禪師

柳生但馬守は劍術の達人として、徳川三代將軍家光公の師範役を勤めたる俊傑であつた、されど彼れまだ劍道の奥義に達して居らなかつた、其の武藝、武術に達すと雖も、百尺竿頭に進一步して斯道の奥義に達しなれば、所謂順逆縦横殺活自在の働きが不可能ない。乃て一日澤庵禪師に參じて

劍道の奥義は禪の第一義と一致することを聽きて豁然として省悟し、それより天下無雙の大達人となつたのである。澤庵は臨濟の高徳であつて、初め其の筋の諱むところとなつて奥州へ流されたが、家光公將軍となるに及んで、其の道譽の高きを聞き、江戸に招致して、心を問はうとした、時に澤庵述懐をものして、家光に贈りて曰く、御意なればかへりたくあん思へども、むさしきたなし、江戸はいや〜

とやつたさうである。彼れは豪宕不羈權門に媚びず、顯貴に諛らぬことの斯の如くである、乃ていよ〜ます〜その高徳の程敬慕に堪へなかつたので、將軍の歸依、彌厚きを加へ、招聘して止まぬので、遂に江戸に下りて、將軍を始め、柳生但州及び徳川の武士に禪風を鼓吹するに努めたのである。將軍も地を品川に賜はりて、東海寺を創立して、其の第一世として住せしめ、時々心を問ふたのである、時に柳生但州が一日東海寺に到り、澤庵和尚に參謁し、屢々禪要を叩いた、和尚時に禪劍一致の妙境あるとを諭した、これ

は彼の有名なる無明住地煩惱の事で、世に不動地神妙録と稱するのである、今その二三を摘載するならば、次の如くである、即ち和尚柳生を論して曰く、貴殿の兵法にて申し候は、向ふより切る太刀を一目見て、其のまゝにそこに合はんと思へば、向ふの太刀に其のまゝ心が止まりて、手前の働きが抜け候て、向ふの人に切られ候。これを止まると申し候、打つ太刀は見事に見れども、そこに心を止めず、向ふの打つ太刀の拍子に合せて、打たうとも思はず、思案分別を残さず、振りあぐる太刀を見るや否や、心を卒度止めず、其のまゝ付け入つて向ふの太刀にすりつかば、我を切らんとする刀を我が方へもぎとりてかへつて向ふを切る刀となるべく候、禪宗には之を還把鎗頭刺人來と申し候。

となほ一步を進んで不動智神妙の義を柳生に論して曰はるゝに、不動とはうごかずといふ文字にて候、智は智慧の智にて候、不動と申し候、とて、石か木のやうに、無性なる義理にてはなく候、向ふへも右へ

も左へも十方八方へ心が動きたるやうに動きながら、卒度も止まらぬ心を不動智と申し候。不動明王と申し、右の手に劍を握り、左の手に繩を取り、歯を喰ひ出し、目をいからし佛法を妨げん悪魔を降伏せんとて、つゝ立ち居られ候、姿もあのやうなるが、何國の世界にもかくれ居られ候にてはなし、容をば佛法守護の形につくり、體をば此の不動智の體として、最末に見せたるにて候。一向の凡夫怖れをなし、佛法に仇をなさじと思ひ、悟りに近き人は不動智を表はしたる所を悟り、一切の迷ひをはらし、即ち不動智を明めば、此身即ち不動明王ほどに此心法をよく執行し、人は悪魔もいやまざるぞと知らせん爲めの不動明王にて候。然れば不動明王と申すも、人の一心の動かぬ所を申し候、我身を動轉せぬ事にて候、動轉せぬとは物毎に留まらぬ事にて候、物は目見て其の心を止めぬを不動と申し候。

と、これは沈毅の徳を修養して、八風吹けども動せず、天邊の月の如き大根抵

を据えしむるの訓諭である。一體剣道には物に動ぜぬと云ふは最大必要である。乃て遂には禪劍一致と来るのである。しかも如何に武術が其の妙を得るも、この不動智に到らぬければ、真に禪劍一致の妙趣に達することは不可能のである。されば既に不動智の要訣を諭したれば、進んで間不容髪となるが肝要であることを説示して曰く、

間とは物を二つかさね合たる間へは、髮筋も入らぬと申す義にて候。たとへば、手をハタと打つた、其儘ハツシと聲が出て候。打つ手の聲の間へ、髮筋の入る程の間もなく聲が出て候。手を打つて後に聲が思案して間を置いて出て申すものにてはなく候。打つて其儘聲が出て候。人の打ち申したる太刀に心が止まり候へば、間が出来候。其の間に手前の働さ抜け候。向ふの打つ太刀と我が働さとの間へは、髮筋も入らず候。程ならば人の太刀は我が太刀たるべく候。禪の問答に此心ある事にて候。佛法にては此の止まりて物に心の残ることを嫌ひ申し候。故に止まる

を煩惱と申し候。たて切つた早川へも玉を流すやうに乗つて、ドット流れて少しも止まる心なきを尊び候。

と諭した。これは機の養成である。一體禪劍は機の一致を極秘とする。即ち禪機軍機劍道にては機合といひて兵學上武術上最も必要とするところである。乃て禪劍一致には機の修養が必要だからこゝに説いたのである。所が機の修養が出来たならば、今度はなほ其の上に石火の機といふことが最大必要となるのである。乃て于茲にその一端を説いて曰く、

これも前の心持にて候。石をハタと打つと否や、光が出て、打つと其儘出る火なれば、間も透間もなき事にて候。これも心の止る間のなき事を申し候。早きこと、ばかり心得候へば、悪しく候。物を心に止めまじくといふが詮にて候。早きにては心の止まらぬ所を詮に申し候。心が止まれば、我が心を人にとられ申し候。早くせんと思ひ儲けて、早くせば思ひ儲くる心に又心を奪はれ候。禪宗にて如何が佛と問ひ候はゞ拳をさ

し上ぐべし、如何が佛法の極意と問はゞ、其の聲の未だ絶えざるに、一枝の梅花なりとも、庭前の柏樹子なりといふべし。いふ事の吉凶を擇ぶにてはなし、止まらぬ心を尊ぶなり、止まらぬ心は色にも香にも移らぬなり、此移らぬ心の體は神とも祝ひ、佛とも尊び、禪心とも極意とも申し候へど、思案して後にいひ出し候へば、如何に金言にても住地煩惱にて候。石火の機と申すも、ひかりとする稲光のはやきと申し候。

と、これ禪の極意を以て劍の妙境に説き及ぼしたのである。次には弓術の上、に説き及んで、これも亦其の極意は禪と一致して居るから、眞の弓術の奥秘と禪の極意と契合することを示したのである。

弓を引き矢を放つことは、誰も知りたることなり。然れども、其の道によらず、其事に熟せず、みだりに弓をひき放つとも、能く的に中り、堅きを貫くこと能はず、必ず其志正しく、其形直に氣總身に充ち、生活し、弓の性に侍ることなく、弓と我と一體となり、精神天地に満つるが如く、引いて、殼に

充つるとき、神定まりて、念を動ずることなく、無心にして、發すはなして、後なほ本の我なり、物に中つて、後靜かに弓をおさむ、これ弓道の習なり、かくの如くんば、遠く矢を送り、よく堅きを貫く、弓矢は木竹を作りたるものなりといへども、我が精神彼れと一體なるときは、弓に神ありて、其妙かくの如し、これ意識の才覺を以て得る所にあらず、其理はかねて知るべけれど、も、心に徹し、事に熟し、修鍊の功を積むにあらざれば、其妙を得ること能はざる所なり。

斯く禪の極意よりして、劍道の極致に説き及ぼし、懇切諭示を蒙りたる、柳生但州の造詣や、ますます深かりしを知らるゝてあらう。

次に澤庵禪師は將軍及び大名諸侯たるものゝ爲めに訓諭して曰く、それ天下を領するもの、珍器異物を我有となし、高爵に進むものは、非なり。珍器異物は、散じて天下の者に與ふべし、高爵は辭して進むべからず、其故如何となれば、天下を領する上は、天下は皆我倉庫の中なり、矧んや又珍器

異物といへども求め難きに非ず、求め易きを以て寶とせば、理當然たるに非ず。若し其の所用に當る時は、即ち天下皆倉庫の中なり、豈これを用ひがたからんや。又天下を領する時は、權威を以て官爵するは、進みがたきにあらず、進みやすきを以て進むは、所特にあらず、布衣にして天下を安んず、これ難いかな。
これ將軍を始め大名諸侯たるもの、其の領土を恣にして、奢侈淫逸にしてはならぬ、宜しく勤儉以て民力の休養を計るべきを諭したのである。
次には武士に向つて精神修養、即ち養心の法を説き聞かせたのである。
心に城廓を構ふべし、心の城廓は人破り難し、石を積み池を堀り水を貯へ専ら之を以て敵を防がんと欲す、敵も亦謀計なきにあらず、石を崩し池を割り水を落とすときは、即ち城廓は平野となるなり。
恩恵を施し國民を撫育せる時は、即ち誰ありてか吾に敵をなさん、これ心の城廓なり。

と。又曰く
士は忠心を盡し、恩祿を得て家富めるはなし、空しく義なくして富めるは耻なり。
と。又曰く
相撲を取る人の勝たん／＼と思ふが故に我よりか劣りたる人をば若し存分骨身の破るほど力にまかせて勝つを喜ぶといへども、亦我に勝れたる力のある人には負けて、身骨を破られて苦しむなり。世間の人の心も人を毀たん人悪かれと思ふ人は、必ず我身あし、我より弱き人をば抑へ滅されても又我に勝る人ありて我を抑ゆると歴然なり。只人も善かれと思ふべきなり。
とかくの如く諄々として臨機應變の説法をなして、徳川初期の武人英雄を教化した其が禪的修養の効果や偉大なるものがあつたのである。

二三 鈴木正三の英雄訓

鈴木正三老人又石平道人といひ、世々松平家に仕へた無二の忠臣である、即ち越々たる三河武士の典型とも稱さるべき英傑であつた。幼時より佛道に志をよせ、夙に濟生利民に心を傾けて居つたのであるが、時は豊臣徳川天下分け目の戦であるから、正三も兩度の役に從つて忠勤を抽んでたが、遂に徳川の勝利に歸した乃て天下は靜謐に歸したて、正三は遂に素願の如く出家して禪味を嘗むるに至つたのである。爾來十餘年間諸國行脚して禪關を敲き參禪辨道に工夫を凝らし、大事を了畢して、三河に歸り石平山恩眞寺に錫を留めたが、其後武州熊谷の天徳院の傍に草庵を結びて了心庵と號し、其處を終身の聖胎長養處と定め雲居物外等の高德と道交厚く、一時道譽四方に喧傳せられた了心庵の生如來と尊稱され、地方の道俗踵を接して群集し來つて禪要を敲く、殊に舊來の緣故により江戸の武士は我れも我れもと來つて參禪するに至つた。正三老人乃極めて通俗的に禪的英雄訓を打して徳川幕下に幾多大小の英雄を打出したのである、今その一端を示

すならば次の如くである。老人一日示して曰く、佛道修行といふは、二王不動の大堅固の禪をうけて修すると一なり。この機を以て身心を責滅するより外別に佛法を知らず。若し我が法に入らんと思へば機をひつ立て、眼をすゑ、二王不動、惡魔降伏の形像の機を受け、二王心を守つて、惡業煩惱を滅すべし。古來より此の佛像の沙汰したる人聞かねども、如何にしても我が胸に相應して、用ひて萬事に自由なり、佛は勇猛精進に諸經に多く説き玉ふて見えたり、此の機を受けずして煩惱に勝つことあるべからず、第一に佛像の機を受くると云ふことよく知るべし。無精にして此の機移るべからず、専ら佛像に眼を着けて、二六時中金剛心を守るべきなり。後世を願ふといふは、此の糞袋を何とも思はず、打ち捨つる事なり。之を仕習ふ間より別の佛語を知らず。我は若き時よりこれ計りを仕習ひしなり。先づ千騎萬騎抜き捕へたる備の中にかけ入り、胸腹を撞き抜かれ

て死にしにして死習ひしに、これやがて仕習ひて翹入られたり。亦谷底に大蛇口を張り居るに飛び込み、角にとりつきて居習ふに、これもやがて仕習ひて角に取り着き居られたり。爰に何もなき樹の下へ、只落ちて死んで見るに中々張り合なくして飛ばれざるなり。然れども此頃になつて少し飛ぶるかと思ふなり。各々も何とも思はず、自由に捨らるるほど、さまざま工みて此の身を捨て習はるべし、成程強き心を用ゐずして叶ふべからず。

と、これ何事も不惜身命の大意志がなくては成功を見ることの不可能ことを論じた、まして武人たるもの否、苟くも世の英雄として一代の模範たらんとするの士はこの糞袋、即ち身命を惜むやうては到底一代を指導するの英雄たることは不可能のである、この道理を翁は死習ひと云ふて、死の懼るに足らざること、身命の惜むに足らざること、を禪理から説き及ぼしたのである。次には武勇に就いて論じて曰く、

佛法なくして武勇つかはるべからず。血氣の勇は何ほどつよしと雖も、どこぞに臆病なるところあるべし。我も高き樹の上に立つて下を見れば足振へて臆病出づるなり、佛法修行なくんば大丈夫の漢となるべからず。

と、これ眞の武勇は佛法によつて出離解脱の修行したものでなければ不可能であるとの説示である。次に坐禪によつて果し眼を仕習ふことを論じて曰く、

侍の役儀なる間果し眼坐禪を仕習ふべし。我も様々修せし中に餘り執盡さざる間とす、修行をもしみどれ、かつたいにもなりて見て修せしなり。然れどもこれでは今の用にたらず、使はれぬぞと覺えて、果し眼坐禪に用ひ習ふて、慥かに禪定の機を知るなり。然る間各六具をしめ、大小を十文字に指働かし、八幡といふてねじまわし、睨めつけて、坐禪を仕習ひめされよ。具足あらば御坊主達に着せて坐禪を仕習はせし。何とだらつ

た坊主の心なりとも、六具鎧大小文字に指したらば、其まゝ心はかはるべし。時に一人曰く、先日も力を出す心と御意ありしによつて、死の字を目の付け處に書きつけ、急度睨めつけて守る様に仕る。師曰く、よしと勢を出しめされよ頓と坐禪の機を受けらるべし。と、これは禪機を知るの要を説示したのである。次には若き武人が修行の用心を問ひたるに諭して曰く、

其方達は何役をなさるゝや、時に一人廣間番を仕るといふ、示して曰く、狼藉者に於ては、縦ひ、樊槍、張良なりとも、八幡通すまじと急度ねじまわして番をなすべし。これ即ち坐禪なり。別に思ふべからず。亦一人は供番なりといふ。師示して曰く、何者にてもあれ、うるたへもの又は道心のもの出て来らば、忽ち無手となつて引組んで、指違へんと急度死を窮め、眼をすゑて供をなすべし、これ即ち坐禪なり。機を抜かして、供をなさば用に立つべからず。

と、これ眞の活きたる禪法を説示したのである。由来多くのもの、坐禪とし云へば、七尺單前に向つて兀々として木槌の如く、土偶の如く坐つてさへ居れば、能事了れりと思ふは、眞の活禪ではない、それは枯木死灰の禪である、眞の活禪は行も亦禪、臥も亦禪、語黙動靜皆これ禪であらねばならぬ、否、搬柴運水一として禪ならざるはないのである。今正三老人は這の活禪を諭示したのである。次には勇猛心を受け得たいと云ふ侍の爲に説諭して曰く、急度唵の二字の眞似を作して曰く、何と此の機移るや。又大手をひろげて口を阿と張り、此の機移るや。何所にも如是造りたる二王を見る。と誰が見ても機の移りさうは二王なり。尤も咩もよし、其外はドコで見ても大形へゴ二王許りなり。亦自ら模様をなして曰く、是の如くきつとねじまはして、ぢり／＼とかくる處を造りたる佛像、鎌倉圓覺寺の十二神の中にある、中々よき威勢なり。我れにはこれが第一に相應するなり。爰を以て果し眼といふといひ出して人に授けるなり。又曰く、總じて羅

漢等に至るまで機をつけて見るべし、機が抜けたる佛像あるべからず。皆眼すわつて活きたる形許りなり。毘沙門のあましのじやくを踏み付け給ふ處は、自己を睨めつけて守る位なり。扱て韋駄天なども急度とつまつた處を造りたるは、よき造りやう、庫裡の本尊ともいふべき像なり。大形佛像は見ゆるが大黒ばかり指して面白くも思はず、定め様になるべし。

これ世に二王坐禪といふたのである、正三翁はこの坐禪法を説いて徳川否、當時の大小英雄を作り出さんとして懇説したのである。次には萬民徳用の中に勇猛心のことを説いて、其の心術の程を示して置いた今こゝに掲げて現代の英雄諸士の参考に提供する。

- 一、生死を守る心。
- 二、恩を知る心。
- 三、一陣にすゝむ心。

- 四、因果の心を知る心。
- 五、幻化無常を觀ずる心。
- 六、此の身の不淨を觀ずる心。
- 七、光陰を惜む心。
- 八、三寶を信仰する心。
- 九、此の身を主君に抛つ心。
- 十、自己を守る心。
- 十一、捨身を守る心。
- 十二、自己の非を知る心。
- 十三、貴人主君の前に居る心。
- 十四、仁義を守る心。
- 十五、佛語祖語眼に着る心。
- 十六、慈悲正直の心。

十七、一大事因縁を思ふ心。
人苟くも右の十七心を堅固め始終忘却せずして守るならば勇猛心を得て英雄たるの根本たる心膽を鍛錬し得らるゝ、又萬民徳用の根本ともなるとの諭示である。

此の他に正三翁が當時の武人に禪的修養の鼓吹に勤めたることは實に多大であつたが今は略しておく。若し詳しきとを知らふと思ふの士は翁の著反古集萬民徳用驢鞍橋等について看取するがよい。

二四 山鹿素行の參禪

日本武士道の開山として遠くは赤穂義士の血管を湧かして元祿の快舉を勃發せしめ又吉田松蔭の如き鐵血兒を産出し、近くは乃木大將の如き誠忠無二の大丈夫と權化したる山鹿素行は固より天資英邁であつて若冠にして既に輩濟を抜いて居つた。しかし、かほどの人物、即ち偉人たる人物を鍛へるには逆も天稟の穎才のみによつて可能上つたものではない、必ずや

禪者の痛棒を喫しなければ、這箇金剛不壞の大丈夫たるとは不可能。彼れは諸學に通じて、皆其の奥に達して居つた位であるから禪の堂奥にも參じたに相違ない、殊に彼れ其の英雄を作るの方法、即ち武士教育は重きを精神教育に置いて、彼の武術や兵學は形式のみに止めて置いた處などを見ても、彼の王陽明の人物養成のその如く、其の奥底には急度禪的修養をなしたのであらふ。若し素行自から他に向つて辨疏して吾れ元來孔孟の教によつて教養するものである、禪の如きは一時の好事的にやつて見たのであるといはゞ、开は云ふに任せんのみ、兎に角事實は彼れ必ず參禪したとは現はして居る。殊に彼れ配所殘筆中に自白して左の如く云ふて居る、

此時分は別而佛法を貴び候て、諸五山之名智識に逢參學悟道を樂み隱元禪師へ迄令相看候。然共我等不器用故に候哉、程朱之學を仕候ては、持敬靜坐之工夫に陥り候て、人品沈黙に罷成候様に覺候。朱子學よりは老莊禪の作法は活達自由に候て、性心之作用天地一枚の妙用高

く明成様に被存候て、何事も本心自性の用所を以仕候故滯處無之、
 乾坤打破仕候ても萬代不變之一理は煌々洒落たる所無疑存候云云。
 斯く素行が諸山の長老殊に五山の智識に參見、新來の黃檗隱元禪師にま
 て參見したるほどであるから、所謂自性徹見の境に進んで天地一枚の妙域
 に達し、生死不二の真境に入つたに相違ない、されば、素行平生の云爲行動に
 見るも、皆この生死不二の真境に入つたに相違ない、されば、素行平生の云爲
 行動に見るも、皆この生死不二の真境に立脚してやつたことが知らるゝ、彼
 の一日の教や、遺言の教や、將た死節の如きを讀んで見るならば、彼れが生死
 一枚の真境に立脚し、乾坤打破底の妙域に到達して居つたとは判つて居る。

二五 大石良雄と正眼國師

末生己前の一句

隱元の爐鞴に入つて幾多の鉛錘を經たる山鹿素行の精力を注入して藩
 國一旦の大事に衝つて、彼千古に輝ける快擧を演じたる大石良雄も亦た雷

に文武の兩道を修めたばかりではない、必ずや彼にはこれ以外の精神生活
 に有つたのである。而して其精神生活するや、言ふまでもなく、禪道によつ
 て其が資糧を得た、彼れは夙に網干龍門寺に詣つて盤珪和尚(正眼國師に參
 得して、屢々痛棒を喫して居る。彼れ元祿六年二月の中ばころ、正眼國師に
 參謁して大事を商量問答して遂に印可を得、一の名硯を受けたることがあ
 る、并は良雄自ら其硯に題して曰く、

予嘗參禪盤珪和尚。師曰：本來不生。予不識焉。今春聊有識其趣。直到和
 尚而舉焉。師曰：是。是。于時見師之傍一之硯。師曰：是則西行法師自作之
 石也。予曰：不然。師曰：即今何人作。予曰：西行未生己前。某所作也。師
 微笑曰：出於爾者。須返爾焉。以贈予焉。予不辭拜受歸矣。于時元祿
 六春二月日。大石氏某受用印。

と、本來不生の端的什麼生か會すと、良雄數々參究の結果遂に未生己前の那
 一句を得た、這箇の一句子、これ尋常一様の看取し得る所でない、良雄一名硯

に逢ふてこの一句を吐出す。宜なるかな、君國の爲めに萬古不朽の壯舉を敢てし、芳名を千歳に輝せるは、これ實に山鹿素行が多年の間、精力を籠めて教育したる結果、山鹿素行の蘊畜せる精神の發現したるものと云ふを得べきも、畢竟するところ、彼の皮肉は素行に得たるも、其の精髓はこれを正眼國師に得たるものと言ふも、過言てはない。

由來古今幾多の偉人傑士、英雄豪傑は、孰れも初は朱子學によりて修養するも、いよく精神生活の向上するに随つて、不満を覺へ、百尺竿頭に一步を進めんか、遂に禪に歸入するのである。素行は初は儒學を羅山に學びたるも、之に満足する能はずして、老莊の學に入り、なほ満足せずして、終に隱元に參見したのである。それと同じく、大石良雄も亦、初仁齋の門に入つて、道學を修めたるも、これまた満足せずして、正眼國師に參見した、ア、前聖後聖、其歸一なりと、眞に向上底の事に到つては、禪にあらざれば、到底解決する能はざるによる。蓋し是れ精神生活の過程の然らしむる所と謂ふべきであらう。

二六 白隠禪師の武士訓

禪的修養英雄訓

白隠禪師は、徳川中葉に出て、殆ど地に墜ちんとしたる禪道を挽回して、再び活潑々地の禪風を擧揚して、上は侯伯相將より、下庶人愚夫愚婦に至るまで、よく臨機應變の活手段によつて、眞の活きたる禪を宣傳したる、五百年不世出と呼ばれたる豪僧であつた。白隠は、駿州駿東郡原驛の人で、諱を慧鶴といひ、姓は杉山、幼より穎悟、十五歳にして、薙髮し、時に自ら誓つて、若し此の肉身にして、火焼くこと能はず、水漂はす能はざる底の力を獲ねば、設ひ死しても修行は止まぬとの鐵石心、金剛不壞の身心を提げて、多年苦修、鍊行したる祖門の英雄である。然し、この英雄、この豪僧の口から迷出せし武士訓、即ち英雄教は、そも如何なる音をか發したるか、次に遠羅天釜を摘載して見やう。

大凡そ人の臣たるの道は、主君の飯を喫して、主君の衣を纏ひ、主君の帯を結んで、主君の刀を帶ぶ、水も亦他處より擔ひ來るにあらず、耕さずして食ひ、織らずして纏ふ、身體手足、髮毛爪齒、總てこれ君恩の所成なり。恁麼にして成長し來つて三四十歳に至つて、主君の政治を助け、専ら王佐の才を抽んで、君を堯舜の君にし、民を堯舜の民にし、専ら君恩に報すべき時、到りて、袖裏に密かに念珠つまぐり、口頭幽かに佛號を唱へて、出仕に懶く、公務を怠り、方寸の君恩に報答すべき心もなく、動もすれば病と稱して退かんとす。恁麼の志行にして、縦ひ三年五歳陰僻の處に有つて、精鍊刻苦、思想盡き、情念止むに似たりといへども、肝膽傷み、碎け、心上常に恐怖多く、鼠糞の落つるを聞ても、胸間裂くるが如し、諸大將にも、諸卒にも、何の專途にか立つべき、萬一國家の大事あらんに、かゝる人々を引て、一虎口の門戸を堅めたらんには、敵軍潮の如くに湧き、旌旗雲の如くに覆ひ、火炮は雷の落ちかゝるが如く響きわたり、貝鐘は山も崩るるばかり轟き鳴る。戈戟は氷

の如く、抜き連れたると見聞かば、飲食咽に入らず、混震にふるへて、手綱とることさへ叶はて、鞍つぼにすがみ平みて、動もすれば自から震ひ落ちんとす。果ては敵兵の爲めに獲らる。何が爲に此の如くなる、たゞ是れ三年五歳寂黙枯坐の致す所なり。縦ひ熊谷平山などの如き勇士なりとも、斯の如く修行したらんには、豈に震へざらめや。此故に祖師大悲善巧ありて、此正念工夫、不斷坐禪正路を指す。諸侯は朝覲國務の上、士人は射御書數の上、農民は耕耘犁鋤の上、工匠は繩墨斧斤の上、女子は紡織機織の上、若しこれ正念工夫あらば、直にこれ諸聖の大禪定。此故に經に曰く、資生產業皆實相と相違背せずと、若し夫れ工夫なくんば、老狸の空穴に眠るが如けん。悲むべし。此道今人棄てて、土の如くなることを。往々我法二空、黒闇谷を認得して、向上最乗の禪なりとして、日々眉を皺め、額を集めて、死鱓の繭中にあるが如く、祖庭は遙かに雲煙を隔つ、佛教を嫌ふと、跛鼠の猫兒を避くるが如く、祖録を忌むこと、瞎鬼の虎聲を聞くに似たり。殊に知

らず、此は是れ二乗常没の舊窠相似の涅槃なるを。此故に宗峰大師曰く、三年までわれも狐の穴にすむ、今ばかざる人も、理りと悲歎したまひ

これ當時の佛信者殊に禪者と稱する輩の病弊を打破すべく、即ち野狐禪に得々たる徒に痛棒を與へたのである。なほ進んでは一國一城の主たる大名諸侯たるものゝ爲に説破して諄々たるものがある、これ彼の鍋島侯侍

臣に説きたるものなりと云ふ。即ち曰く、一國一城の主たらん人は、第一に王位を守護し、萬民を保せん爲めに保重す。邦家を保重せんとらば、先づ須らく生民を愛顧すべし、民肥え國ゆたかなるを強國と云ふ。強國の主として王位を守護せんと。身軀健康に壽算延長なることを計るべし。若し夫れ多病短壽ならば、何の暇ありて帝都を守護し、邦家を治め、生民を愛顧するを得んや。身軀健康長壽を得んとらば、飲食を節にし、人欲の私を制して養生の

至要を求むべし。

養生の至要は良醫を近づけ、内觀と信力と並べ備へて武運を養ひ給ふべし。殊更一方の大將たらんず人は、強敵をしたがへ、帝都を守護し、萬民を安んずる大役なれば、常に信心堅固にして武運を養ふを以て第一とし給ふべし。

死の字は第一武士の決定すべき主要なり。死の字を參究せざらん武士は身心共に怯弱にして、主心終に定まること能はず、こゝはの大事の場所になくしては、思の外に臆病未練にして、主人の先途に立つこと能はず。この爲に云ふ、驚怖みだりに起るは主心定まらざる故なり。と。縦ひ平生武術は精鍊して太刀は九郎、鎗は眞田ほどつかひ得たりとも、主心定まらざる人はまさかの時に臨んで、おくれふるへて、一向用に立つことあたはず、然らば則ち萬能にすぐれたるは、主心なるべし。若しそれ主心を定めんとならば、專一に死の字を決定したまふべし。死字纔に決定する時

は、主心定りたることを磐若などをゆりすえたるが如しと。謂つべし厚
重山の如く寛大海の如しと。死の字縁に決定したらん人は是快得悟の
一丈は掌上を見るが如けん。唯かへすも主心をねりすえ、朴實に身
を治めさせたまひ、唯今までの百萬石の若殿様をば、玉簾金屏の中錦帳繡
幕の奥雲井のあなたに休ませまし置き、大切なるべくは高かみにおかず、
危き處を嫌ふ如く、自身は今日より引き下げ、仁政孝慈の使はれものにな
りて、山海遙かに隔たりたる、卑官奴僕にあさましき下郎におちぶれたる
を覺悟せさせたまひ、しかと主心をすえ定めて、かりそめにも大身主君の
顔貌をせず、朝夕の膳部も一菜にすぎず、夏冬の衣類も多く綿衣にして、人
目を忍びては、庭の掃除やてうづの水、或時は興に乗じたる貌にて、たのふ
だ人の御馬のすそ、見馴れぬ下郎の業までも仕習ひ手馴れ、内證は大樹神
君の聖慮を主意とし、仁澤を生民に施させ玉は、天これに賜ふに長壽を
以てし、地是にさゝぐるに多福を以てして、かの仁者は、壽しといへる本

文に少しもたがはず、浦島が長壽を保たせ給ひ、萬世の後までも明德至善
の名大將なりしにと仰がれさせ給へかし云。
又曰く、兵は得易く、一將は求め難しと申す事も得れば書中、少しにても
取るべき所あつて、幕下の道情をも助け増して、禪學成熟したまは、其の
餘波必ず左右の人々に及ばん、左右若し其の恩波に浴せば、其澤必ず一城
の人々に及ばん、何が故ぞ一人の心は千萬人の心なるが故に、終に天下國
家に及ぼし、上王化を佐け、下庶民を利せん、然らば則ち宇宙の間、那箇の盛
事が之に如かんや、これ老僧が平生の微志なり云。
老夫壯年より思ひ付き侍りけるには、正念工夫の勝手には、武士の身の上
ほどよき事はあるべからず、武士は明けくれに、身を懦弱に持つこと叶は
ず、出仕にも附合にも、如何にも嚴重なるものなれば、髪結立て、上下か又は
袴羽織にて、大小手挟み、折目高なる起居の上には、正念工夫は溢れ流る
ほど、潔よく打見ゆ、況してよき駿馬の太く逞しきに、打ち騎つて、百萬騎の

敵軍をも人なき處で通るが如く、乗り破りく、駈け崩すべき顔色は、天晴
見事なる不斷坐禪、かく工夫して行きたらんには出家は一年にて得力こ
れあらば、武士は一月出家は百日にて得力これあらば、武士は三日にも利
運は開かるべき者を、志なく案内知り玉はぬ故に生暖磨墨とも云ふべ
き大馬の背上に闇々八石五斗無明妄想の重荷をこぼれく、積み載せて、
いかめしげなる貌してあたり拂つて乗り連れく、打ち通り給ふは、近頃
以て残念なる風情ならずや。かく大切なる場所をばやりすごして、應々
は仕官の身なれば坐禪などする餘隙は勤めの中は存じもよなるぞなど
宣ふ人とはらぬ事海中にありながら、水をたづぬる心地こそすれ云云斯
く忌憚なく當時の禪病を打破し、當時の士風の荒廢せることを慨して、國守
領主を始め、士人に至るまで眞箇の活禪を修せしめんと鼓吹したのである。
是に於て徳川中世以降衰頽せし佛教上に一大活氣を添え、まさに地を拂は
んとしつゝある禪風を發揚したのである。

二七 東嶺禪師の武士訓

東嶺は白隱門下の二神足に呼ばるゝその一人で、遂翁の法弟である。そ
して微細は東嶺大器は遂翁と世に許されたほどで、東嶺の頭は極めて綿密
であつた。それは彼の著無盡燈論を讀めば判る。彼の書は東嶺の人格そのまゝ
である。白隱之れを見て、これは後世の點眼藥である。と印可された位である。
であるから東嶺を知らんとするならば先づこの書を見るがよいといはれ
た。東嶺はかく綿密なる頭もて、白隱の後をうけて當時の武士教育に努め
た。其の婆言を知るには其の著快馬鞭の中に憤勵の義と云ふがある。婆心懇
々として説き諭した。

唯尋常物靜かなるのみならば工夫の精彩と云ふもあるまじ。工夫の精
彩なければ、得力と云ふこともなし。國の亂を治むるには、大事に及んで
戰場に向つて已に危きに臨んで恐れず、取かゝり、打ち返して戦ふてこそ、
勝利は得るものなれ。工夫の法戦も之に同じ、諸の境界に奪はれ、諸の

想念に亂さるゝこと勝負を決するの好時なり。此心を辨へ懈怠の心なく進むべし。物静かなるときはこれぞ誠に城内にあつて兵法軍術修練するなりと心得て丹精を抽んで修行すべし。物躁しき時はこれを戰場に臨んで勝負を決するの時なりと心得て力をつけて工夫すべし。これ當時の武士に打坐工夫の要を論したのである。次に當時徳川幕府始めとして天下の諸侯大名が皆神佛を輕侮し上天業の廢れ聖徳の塞がれるを思はざるの風あるを慨してこゝに訓戒的婆説をなしたのである。曰く、

代々の聖君賢臣皆禪に參じ法を明めてその徳を天下國家に及ぼすもの、擧げて數ふべからず。中にも平の時頼は聖一大覺の旨を悟つて仁政を千歳に稱し。楠正成は三光關山の禪に徹して忠功を萬世に顯す、甲斐の信玄は快川等の諸師に參じて兵法の一家を立て、越後の謙信は鐵堂等の諸老に調して武威を四塞に震ふ。今川の雪齋長老と云ふは、即ち清見

の太原和尚にて侍るべく義元之を師として禪關を極め、武道に達して皇祚を守り黎民を養ふ。これを國家に益なしといふべけんや。然るに今其の天業廢れ聖徳の塞れる惜み哀む心なきは身を忘れ心を欺くに似侍べらんや。中にも若し仁義の道を慕ひ忠孝の教を志す君子の輩あらば、三度此文を復せよ。若し能く自性を明め得、自知を研き出したまはば、彼の克己復禮の大仁了々として手に入つて堯舜を義牆に見、文武を旦暮に仲ぶことを得て誠に聖君賢臣といはれんも耻なからましのみ。矣。これ禪理を武士に適用して英雄訓を打得したのである。當時大小の英雄果して其が感化を享受せしもの多大なるものがあつたであらう。

二八 勝海舟の禪劍の物

我邦維新の大業を補翼して芳名を千歳に輝かせし、大西郷即ち南洲隆盛は薩の福生寺無三和尚に參じて禪味を咀嚼し、其他篠原國幹、桐野利秋、山岡鐵舟、勝海舟、尾得庵等は皆禪門に參じて漆桶打破底の境界に入つて居つ

たのである。今はこれ等の一々について説話するの時間が無いから、唯維新當時に逆境に立つて驚天動地の大活劇を演じた幕末の偉人として我邦開國史上忘るべからざるもの二人の禪定力の活現を紹介しやうと思ふ。然し二人者とは誰であらう、一は勝海舟にして、他は山岡鐵舟其の人である、乃て今はこゝに先づ海舟を紹介する。

勝海舟は幕末の偉人であつて、我邦維新開明史上の大偉人、西郷隆盛と相對して國民の忘るゝことのならぬ偉人である。即ち當時徳川家瓦解の時萬死の境に出入して、主家徳川の安然を謀り、江戸市二百萬の蒼生を安堵せしめたるが如き、大活動を演じた豪の者である、彼れは如何なる修養によりて斯る大膽不敵、天下を一肩に擔ふの大決意を爲して蹶起したるか、これ必ず其が精神の蘊蓄する所のものがあつたのである、开は即ち禪の定力である。海舟翁自ら人に語つて曰ふた、

予が京師にありし時、當時勤王黨と呼べる人々の中に痛く予を惡む者が

あつた、何とかして彼を殺さんと計つたが、或日四條通を過る折しも、傍の物影より覆面したる武夫一人、銃を以て予を狙ひ、今しも火蓋を切らん様子なれば、予も一時ギョツとしたれども、少しも騒かず、突然件の武士の方に向ひ、狙ひがまるて外れて居る、それでは己れの體はうてんぞと手を振つて申したところが、キヤッ予の舉動の如何にも泰然自若たるを見て、彼武士も其の氣に吞まれたか、銃丸を放たずして一散に逃げ去つた。

而して海舟翁は如何にして斯の如き心膽を鍊り鍛たるかと云ふに、次の如く、翁は語つて曰ふ、
予が本當に修行したのは、劍術ばかりぢや。一體予の家は劍術の家筋であるからとて、予の父も骨折つて修行させんと、當時擊劍の指南をして居つた、島田虎之助といふ人に就けた。此人は世間普通の擊劍家とは違ふ所があつた。島田の云ふには、今時皆人のやつて居る劍術はほんの型ばかりぢや。折角の事に、足下は本當の劍術をおやりなされと。

それより島田の塾に詰めて、自から薪水の勞を取つて修業した。寒中になつると島田の指揮に従ひ、毎日稽古がすむと夕方より稽古衣一枚で王子権現に行つて夜稽古をした何時も先づ拜殿の石段に腰をかけ、瞑目沈思、心膽を錬磨し、更に起つて木劍をすぶりし。更に復元の石段に腰をかけ再び心膽の錬磨にかゝり、それより復起つて木劍をすぶりし。此の如きもの數回遂に天明に至る。それより直ちに歸つて朝稽古を爲し、復夕方より王子権現に出かけ一日も怠らなかつた。始めは深更に唯一人森々として樹木茂れる社内に立ち居ることとて、何となく氣怯れし、寒風梢を拂ふ聲物凄く、覺えず毛髪を豎てたるが修業の積むに従ひ何とも感じなくなり。遂には四面寂寥の中に在つて、ヒウヒウと梢を掠める寒風の聲を聞くことが、一種の趣きを添へる様になつた。時には二三人の同門生が來ることもあつたが、寒さと眠さに避易し、何時も夜半より近傍の人家を叩き起して寝るが常であつた。然れども予は

馬鹿正直に一度も左様の事はせなかつた。此修業の効は忽ち幕府瓦解の前後に顯はれ、千辛萬苦に堪へ得て少しも痺まなかつたのは全く此修業の御蔭である。此時分には寒中に足袋も穿かず、袷一枚で平氣であつた。寒さ暑さなど云ふことはどんな事やら幾んど知らなかつた。今此齡になつて身體も達者で、足も確かに根氣も丈夫なのは全く此時の修業の餘慶ぢや。島田先生が劍術の奥義を極むるには先づ禪學を修めよと勧められた。それで牛島の廣徳寺と云ふ寺に往つて禪學を始めた。大勢の坊さんと禪堂で坐禪をして居ると、和尚が棒を以て片端から肩を叩くのであつた。そうして幾んど四ヶ年、眞面目に修業した。此坐禪の功と劍術が予の土臺となつて後年徳川瓦解の時萬死の境に入つて遂に一生を全ふした。あの時分刺客やなんか逢ふたが、危難に際會して這れぬ場合と見たら、先づ身命を捨て、かゝつた而して不思議にも一度も死ななかつた。茲

に精神上の一大作用が存在するのぢや。人一度勝たんとするに急なる、忽ち頭熱し、胸跳り、措置顛倒し、進退度を失するの患を免る能はず。若し或は退いて防禦の地位に立たんと欲す、忽ち退縮の氣を生じて、敵手に乗ぜらるるを常とす。

予は此人間精神上の作用を悟りし、何時も先づ勝敗の念を度外に置きて、虚心坦懐にして事變に處した。それで小にしては刺客亂暴の厄を免れ、大にしては瓦解前後の難局に處して綽々として餘裕があつた。是れ畢竟劍術と禪學の二道より得たる賜である。

彼れ西郷南洲をして幕府にこの硬骨漢あるかなと驚歎せしめたるも無理からぬ、海舟には斯くの如き禪の深き素養深き造詣があつた。

二九 山岡鐵舟の禪定力

鐵舟名は鐵太郎といひ、海舟と並び稱せらるる幕末の英雄である。其の詳しき史傳などは其の向きに譲るとして、こゝには彼れが修禪の力が如何

に活動せしかを紹介しやうと思ふ。維新の際、徳川幕府瓦解して、慶喜公には朝敵の賊名を衣せ、四里四方の江戸城下を將に焦土に歸し、剩さへ二百萬の生靈を塗炭に陥れんとするの時に方つて、挺身以て君家の爲に一命を抛つ、覺悟にて、薩人益滿休之助と共に、勝海舟の書狀を携へ、官軍の參謀西郷隆盛に致すの使として、官軍に赴き、西郷隆盛と數番の談判に及び、遂に君家の名分を立て、慶喜公の恭順を全し、二百萬の生靈を塗炭より救ふの偉勳を立てたることは、皆人の知るところである。これ元より至誠一片の徳によるといへども、そのこゝに至らしめたる素養があらねば、不可能事である。所謂虎穴に入らざれば、虎兒を得ずである。今彼れが定力を活用して、以て君家を雙肩に擔ふて立ちたる大勇猛心の蹤を話さうと思ふ。乃ち山岡鐵太郎、徳川の參謀、勝海舟の書狀を懷にし、蹶然起つて、官軍の總督府指して發向した。時既に官軍の先鋒は、旗幟堂々として、六郷の渡場近く進んで來たのである。時に山岡鐵太郎はこの狀況を見て、

切りむすぶ太刀の下こそ地獄なれ

踏み込行けばあとは極樂

と云ふ劔道の歌を吟じて隨行益満友之助を勵まして、おめず臆せず正々堂々わき目も觸らず慕直に官軍の真中を通過して、本陣目がけて進み行き、其處ぞ本陣なりと思ふ所に到るや、大音聲に呼はつて、

朝敵山岡鐵太郎此度總督府に對し、歎願の筋あり罷り通る者也、此段態々申置く

と陣營中に響きわたれどなつたのである。此時山岡の勇猛心は、實に至剛至大、天地を動し、鬼神を感ぜしむるの大威力があつたのである。

彼れは這の大勇猛心を振起して野猪の突進するが如く、官軍の陣營を通過して駿府に到着し、參謀西郷隆盛に面會して來意を告げて曰く、

拙者は徳川慶喜の臣山岡鐵太郎なり。先生の御高名は豫ねて拜承致す處で御座るが、承る處今度は朝敵征伐として東下さるる趣で御座る

が全體御趣意は曲直正邪に拘はらず進撃せらるる譯で御座るか、將た反亂さへ鎮定すればそれで御満足で御座るか、何れか御決心の程承り度しと、

西郷隆盛答て

反亂を鎮定するの目的ぢや

と云ふ山岡鐵太郎さしおかず直ちに陳べて曰く、

御趣旨御尤も千萬で御座る物の道理は左こそあるべし、然らば我主人徳川慶喜に於ては恭順謹愼して上野東叡山の菩提寺に閉居して罪を待つて居ります。生死の程は唯だ朝廷の御沙汰次第で御座る、然るを何の仔細ありて、斯く大軍を差し向けるゝので御座るか、詰問に及んだ。

此時西郷は既に幕軍が王帥に抵抗したるに、あらずや、されば徳川慶喜が恭順謹愼の實證は何れにありやとの趣旨にて反問した。鐵太郎屈せず、撓ま

官軍に抗戦せんとするは脱走の鼠賊にして元より徳川家には關係する所のものにあらす。故に微臣其意を推知し、主人慶喜か恭順謹誠忠無二なる心事の程を朝廷に貫徹致さずば遂に主人慶喜も亦彼の脱走せる鼠輩と同じく混視せられんとを恐れ、斯く虎口を忍んで當御陣營まで推參致したる次第なり。願くば拙意の程大總督の宮へ御執りなし下され

たし。と赤誠をこめて陳辯したる所西郷如何に感じたか暫しは默然として居つた。山岡なほ疊みかけて陳辯して云ふには拙者は主人慶喜の意を代表して禮を執つて斯くは言上仕る也然るを貴殿に於て此禮を御執成し下さらずば最早如何とも詮方なし唯鐵太郎一死あるのみ。ソモ斯の如き場合に立到らば麾下十萬の士其の生命を惜まざるものは微臣鐵太郎のみならんや。さすれば幕府はあるか、未來日本天下は如何になりゆくか計りがたし。其れにても貴殿は斷じて進

撃は御止めにならざるか若し果して然らば王帥の戦とは申されまじきにあらずや。謹んで惟みる。天子は民の父母なり、非理を明かにして不逞を討つこそ眞の王帥なれ。謹んで朝命に背反致さずと申す忠臣に對し、寛典の御處分なくんば暗雲四方に起つて天下愈々大亂とならん。伏て乞ふ願くば足下少しく御推量あれ

と、至誠金鐵の如き意氣込にて言上したれば、流石の西郷隆盛も斯誠忠無二なる赤誠に感じて言ふやう、御説明の程委細承知仕る、依て某直ちに大總督の宮へ足下の至誠の旨を言上して御命令を仰ぐべき間御苦勞ながら暫時御休息あれと、會釋して直ちに總督の宮の御前會議となつたのである。ア、這の御前會議の結果は、そも如何なる事をか山岡の面前に提供し來るか、彼れ山岡の胸中一刻千秋の思をなして西郷の齎し來る結果を待望して居つた暫時にして西郷は御前會議の結果として七箇條の命令を提供して山岡に示して

曰く、

如上の御命令を徳川家にて遵奉せば寛典の御沙汰にも相成るべきが足
 下に於て御請合出来るや否や
 と。是に於て山岡右七箇條逐條熟覽するに、其の第一條に徳川慶喜を備前
 へ御預け仰附らるとの箇條があつた。乃て鐵太郎奮然として曰ふ、
 謹て令旨を拜受す、然る處第一條を除くの外は、異議なく遵奉仕るべき
 も、第一條は鐵太郎斷じて遵奉致し難し。此儀は小臣に於て斷然御請合
 申難き故願くば再度御評定下されし
 と、懇願に及んだ。所が西郷の申すには、それは折角の御懇請なれど朝旨なれ
 ば據どころなし、到底も再議に及ばれぬと。是に於て鐵太郎大に覺悟の面
 色にて西郷に向つて云ふやう、
 されば足下試みに御一考あれ、徳川慶喜を今備前に幽さるなど申聞けな
 ば部下譜代の諸士等は甘んじて承知致すまじ、詰る處干戈に訴へて王師

に抗戦するに到るは必となり、然る時は敵身方とも同胞國民が幾萬の生
 靈を失ふにあらずや。抑々日本國に生を受けたる吾々が各自其の主の
 爲めに盡す所は古今同一轍なり。假りに茲に拙者と貴殿と位置を變じ
 て一論を致さんに、若し貴殿の御主人島津公が不運にして此の如き場合
 に立ち到り、朝敵の名を蒙り、官軍の討伐を受くるものと假定せば、貴殿は
 拙者の地位に立ち、主家の爲めに盡力せらるるに當り、寡君慶喜が如き處
 置を蒙りしならば、貴殿は黙して島津公を他人に任せ、異境の地に御移し
 成さるか。不肖鐵太郎の如きは死すとも主人を他人の手には渡し申
 さず、貴殿には如何の御考へにや、
 と、血涙を流し、席をうつて至誠を吐露したのである。西郷もこの至誠に感
 じて同情に耐へず、共も涙を流して鐵太郎を慰めて曰く
 嗚呼、足下の言はるるところ至極道理あり、不肖及ばずながら徳川慶喜公
 の御爲を計り申さん、御心配あるなど、慰諭し、且つ背を撫し、赤心を披瀝し

て曰ふ、
 嗚呼、足下は希有の勇士なり、誠の武夫なり、實に虎口に入つて虎兒を探るとは眞に足下の事なり。不肖は足下の大決心、生きて還らざるの覺悟あるを察したり。國家の存亡は足下の背肩に掛てあり。足下幸ひに自重せられよ。吉之助愚かなりと雖も、猥りに戦を好む者にあらず。徳川公の事に至りては此の吉之助一身にかけて決して悪しくは取扱はず、何卒此意を勝氏へ傳へ給はれ
 と、互に胸襟を開き、肝膽を相照して國家の前途を物語り、他日を期し相別れたりと。
 斯くして、徳川慶喜公は朝敵の汚名を蒙らず其の終りを全ふし、朝廷にて多くの國民を殘害せず、王政を復古し、維新の大業を成就し、外は以て外國の顛顛を防ぎ、内は以て干戈を動かすの慘狀を見ずして、東洋大帝國の基礎を開きたるは、一に是れ幕末の偉人海鐵二舟の方寸に出たりと云ふも過

言てはない、殊に鐵舟の如きは眞に是れ虎口裡に身を横たへ、蒼龍窟に下つて驪龍領下の珠を取るの大丈夫、大英雄と謂ふも敢て過稱てはなからう。

道は天地自然の道にして人は之を行ふものなり。故に天を敬するを以て目的となす、天は人も我も同一に愛す、故に我を愛する心を以て人を愛すべし。

命もいらぬ名もいらぬ、官位も金もいらぬ人は始末に困るなり、此始末に困る人ならては、艱難を共にし、國家の大業を成すこと能はず、然れども此の如き人は凡俗の眼には見るべからず。

西郷隆盛遺訓

四 生死交謝の時如何

一 英雄の死生觀

平生は口吧々としてサモ見性でもしたやうなこともいひ、また七尺單前に兩脚を曲げて、鬼眼睛を弄して大千世界も打床一片にあるなど、大言壯語するとは誰れにも可能るが、サテ爰一番生死交謝の一刹那に至つて眞に

生死を透脱し得る底のものは少ないのである、即ち生死岸頭に立つて兩手
撒開底の大丈夫は稀れてある。故原坦山老師は、自ら先人未發の眞理を佛
教上に發見して、佛仙會を組織し、或病同源、腦脊異體の說を主張し、禪定力に
よつて諸病を排除し、健康長生すると唱道した所が世の佛者及學者輩が
種々非難もし、評論もしたが、老師は一々辨駁するを用ゐず、兎も角拙老の臨
終の狀を見るがよいぢやと云はれたそうであるが、果せるかな、老師の臨終
は誠に立派なものであつた、即ち臨終前數時間に、死期を豫知し、自ら知己友
人に臨終の告知書を認めて、同時に到るや、更に苦痛の態もなく、安然とし
て眠るが如く逝かれたてはないか、實に老師の云はるゝ如く、平日は人は何
とも云ふがよい、たゞ其の生死交謝の時ぢや、最終斷末場の狀態が、其の人の
見地、定力が顯はるゝのである。鳥の將さに死なんとするや、其の聲哀しく
人の將さに死せんとするや、其言や善しとある如く、誰人も斷末場に臨んで
は、偽善もなければ、何もない、眞に良心其のまゝの發露である。實に明歴々

露堂々である、洞然明白である。ソコの一念が眞に生佛不二の正念である、
人本具の佛性が現はるゝのである、淨土の二十五菩薩も來迎せらるゝので
ある、十萬億土の彌陀如來も出て來らるゝのである、これ皆臨終正念の顯は
れてある。されどこれ這の正念は、誰にも皆可能かどうかは問題である、
开は平生の心掛け、即ち修養の功によらなければ不可能である、平素に何
の修養もなく、邪見放逸に一生を消すものは、死に臨んで七顛八倒、所謂斷末
場の苦を受くるのであるが、ソコが平生に作家の毒手に遭ひ、漆桶を打破
し、擒縦自在の境界に到つて居らなければ到底この一刹那に臨んで、正念相
續して安詳として脱落するとは不可能のである。
前に述べたる如く、苟くも英雄たらんものは、結局この生死透脱の境に入
つて居らぬければ、眞の活働が不可能のである。熟々我邦の歴史を通觀し
ても判るであらう、同じく武士と云ふても、鎌倉以前の武士と以後の武士と
は自からその云爲行動に徑庭あるを觀るであらう、こは歴史の背面から觀

れば自から知れることである、殊に著しきは、北條の末葉、建武中興前後の京都、紳縉間の氣風の從來藤原氏や平家などの如き文弱の風は更になく、一種の活氣を帯びて居つたことは事實である。开は彼等北條討伐に失敗して北條氏の爲めに生擒せられ、斬殺せられたる公卿輩の臨終觀は實に正々堂々たるものがあるに觀ても、如何に當時鎌倉に對して京都公卿間に禪風が吹き入つたかが判るのである。畏れ多くも龜山上皇を始め花園法皇、醍醐天皇などに於かせられて夙に禪によつて御修養せられたのであるから、上の好むところ下はより甚しきはなして自から縉紳間に及ぼされたのである。時に利あらず、多勢に無勢で事は失敗に歸したが、兎に角當時大塔の宮を始め縉紳公卿が起つて武家を壓倒し、王政復古の洪業を爲さうと云ふの勇猛心と活動を有せしは、從前の縉紳公卿に見ざる所である、これ他ならず京都禪の勃興したる影響である、そは如何なる抹殺的歴史家でもこれの事實は抹殺することは不可能であらう。論より證據先づ鎌倉以後、殊

に北條氏の末路の武士及び京都縉紳公卿が生死交謝の時如何を見るがよ

一 源俊基

源俊基は北條討伐軍の饒將であつたが、運拙なくして北條軍の爲めに捕虜となり、鎌倉に監送せられて、刑場の露と消えたのであるが、將に斬られんとするに臨んで、彼れ懷中より一葉の疊紙を取り出して、頸を押し拭ひ、開してその紙を披きて一偈を書し、神色自若として死に就いた、即ち其の偈に
古來一句 無死無生
萬里雲盡 長江水清
と大書して、筆を投じて、鬢の髪を撫て付け、その亂れを整ひたると思ふ一刹那にして、首は前に落ちたりと。何ぞ其の態度の悠然たる、苟くも修禪の素要なくして可ならんやである。

二 源具行